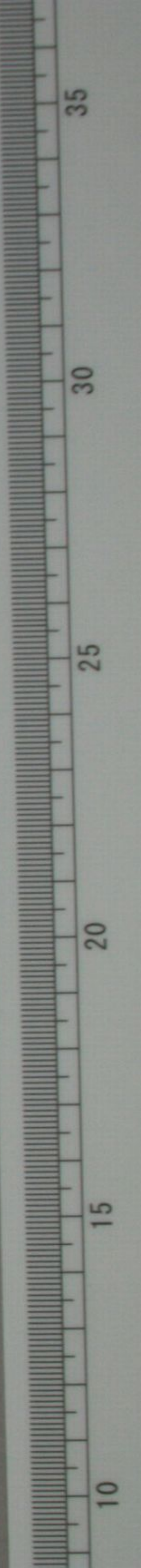


昭和十三年六月廿日起筆

成實坐右錄

四

特別  
14  
1919  
494





戊寅坐右録四（昭和十三年六月中院起筆）



白雲紅樹

九霞山樵寫  
 壬寅夏月  
 中野忠太郎

池大雅筆 白雲紅樹圖 絹本（部分）

新瀉 中野忠太郎氏藏











○頃口或る人から「不問法之中侍」と標記せざるが、シラレウ  
トを贈らん。中をえると、元が切腹禁止の首明者  
に、此の主唱のせえり士族の二暢まんてか、暗殺せんと社家  
又斃ん。自今、切腹禁止が、此の初年、公儀所、提  
案せえ、大人数の反対が潰れ、その事のみをわづら  
か、其の提案者、此の事、あらわあること、始め、わづら  
此人の公儀所、勤務の人が、或、御用金、度、止、論、衆人の、奴、を  
を没収する、此を、や、或、度量の、統一を、主張、し、人、の、領、を  
卓見の所有、あ、つ、甲、の、里、正、三、枝、家、の、出、で、小、室、氏  
の、長、子、と、さ、早、く、男、子、を、校、々、と、評、さ、る、ま、さ、る、の、  
其、公、使、ハ、リス、ハ、兵、部、寺、附、の、近、の、公、使、領、と、あ、つ、れ、以、彼  
其、の、方、の、日、本、法、を、教、へ、ル、の、が、ア、ー、子、ス、サ、ト、ウ、の、如、き、日、本



道、生、東、に、と、り、ん、と、ある。此、人、の、神、田、者、ま、知、ん、て、公、儀  
所、又、入、つ、れ、逸、才、の、あ、つ、れ、の、以、昨、命、と、教、え、ん、の、の、場、也、と、い、  
あ、ふ、お、室、の、三、枝、向、左、の、主人、が、此、の、人、の、血、縁、の、あ、る、著、所  
取、調、所、の、海、轉、員、と、あ、つ、れ、こ、と、も、あ、る、兵、部、院、の、大、主  
典、の、あ、る、に、備、へ、三、十、四、年、の、あ、つ、れ、

○銅像ととも、あ、い、く、う、ふ、さ、く、と、も、室、内、の、置、と、も、あ、る、  
い、自、分、の、あ、つ、れ、の、銅、像、の、代、り、の、銅、像、を、作、り、し、と、考、へ、ん、こ、と、も、あ、  
つ、が、と、身、も、こ、を、こ、を、こ、を、こ、を、こ、を、こ、を、こ、を、こ、を、こ、を、こ、を、こ、  
日、か、あ、る、の、を、あ、つ、う、く、感、へ、ん、に、於、こ、も、此、の、教、員、中、  
三、枝、の、デ、パ、ー、ト、の、じ、ご、う、ウ、キ、ン、ド、ウ、に、石、彫、り、し、此、の、  
可、う、う、大、き、い、人、像、を、造、り、し、洗、濯、女、が、洗、つ、て、あ、る、像、  
が、雨、風、を、こ、こ、出、来、し、あ、る、の、を、感、心、し、る、像、は、造、り、



正木直彦氏陶像



此に掲げたのが其れで、從來にない大作で、銅饌鐘の時節柄特に注目されてゐる

屢々本紙上に紹介した正木直彦翁の陶像は沼田一雅氏の苦心に依りて等身大のものが仕上つて正木會館に安置された、即ち

〇細俊も己の拙作は報が一巻  
三千部の祝の何のまゝをく  
よと瑞香や来れぬいまゝを  
へて下の如きよも細書しやれ

鉄おや石の限のゆゑも  
製心かよけんは陶像も  
ハ日本宮に置くるいぢる  
南と思はん。

### 幕末實戦の

#### 經驗こそ尊し!

市島 春城

昔紙の一万三千部を説きし、持久戦の懸念、銃砲の備に於て、  
是附け幕末實戦を經驗されも、他に倍するの覺悟があり、  
たるところで、舊藩の風習美は萬般の措置必ず他所の模倣か  
感の諸藩の上へ超絶し、小生のものがあるものであらうと信  
常に欣賞するところでありませす。實紙の益々健全にして非  
此度の開戦に方り、貴方の人々、常時報國に努力あらんことを祈  
は、既往の經驗を推し、尤も戦争ります  
苦を認識せらるゝことであらう

藤原製

〇野田が今も或る氣一即ち行はんとあつて、  
の合戦の圖し、  
どくどく呼吸があつて、  
知らぬが風俗も、  
え揚つて、  
を思つて、  
歡面を、  
風俗を、  
もの一つ、  
も底流の、  
のボスターの、  
全く見換を



○評及此と代者を観後し、志を人々を導きしよと書きつ  
けりし

叩かぬ書書の杖を吐く木魚ころり 河津 瀬石

山門の仁王の迫る若をふころり 龍香

大依道よりしるる武鳥もあつた み紀

石垣の鴨吹きさよらるる 小波

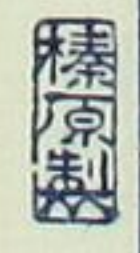
行く人も結句の色にさらけ 鶴松村相

まつ秋の大鐘つらや度法 河井

暗の夜を大針に逢ふ 島助

津巻和事の遊女の回遊 津巻

池ぬに夜さく月つゆ 残るが



古坂の風の跡

庭もまらぬひくきぬれを うつと思ひける

うつと思ひける

金瓶たまごころり

世の中は鏡にうつる 興きころりあし

興きころりあし

梅さく大日本 櫻城

櫻城 大日本

○世界の苗太人を忌む場は ハ世界を産すんとしとある、或る洋の物への人のこころ







ちて甲午年を無くとすくの子忘印たるを、あふかいら四附  
し来り、實則古項の概記に歴中なるを、ことあるは、辭也  
かして去廿一日午前六時より十一時を、法話を速記せ  
し、あ、此の祥方、臨河、今を、法行、こと、改進黨創  
止の際の事、改進黨成立の事、の次、協會、壬午、協會の  
夏、大隈、差掛、冠、市、時の事、の次、協會、壬午、協會の  
事、飲室、室、法の事、初、約、も、三、協、會、の、事、  
自由、黨、の、手、出、亮、景、の、事、を、法、り、二、時、分、を  
あし、あ、林、の、才、二、回、の、法、治、を、法、す、

○越、休、の、早、大、三、校、の、新、生、の、事、を、生、體、の、其、の、創、立  
ハ、或、人、と、母、校、の、創、立、と、時、を、同、く、し、開、校、の、時、来、る、の、子、生  
ハ、似、似、し、た、の、こ、も、あ、る、當、時、の、性、を、五、十、錢、の、合、身、を、お、ち

標原製

嘗て、黄、餅、を、備、つ、て、大、氣、味、を、吐、い、た、と、い、ふ、事、も、例、も、  
毎、日、開、く、と、熱、心、の、事、を、あ、つ、た、地、府、の、事、を、生、も、進、め、  
つ、た、が、越、休、の、創、立、の、事、も、早、く、い、ま、ん、が、と、り、ま、り、  
あ、る、其、の、創、立、の、事、も、永、後、に、ま、り、と、り、ま、り、他、に、  
あ、る、こ、の、創、立、の、事、も、先、輩、の、遺、産、に、あ、る、こ、の、  
を、い、つ、ま、り、の、概、略、を、も、法、治、も、あ、か、か、り、と、り、ま、り、  
自、家、の、法、治、を、せ、う、し、の、書、物、を、お、ち、後、の、例、も、  
夏、日、回、を、完、が、起、つ、た、こ、の、後、に、開、校、を、設、け、  
を、し、た、自、分、の、故、國、の、創、立、の、事、も、五、六、年、  
始、り、今、長、を、置、い、た、時、に、會、長、に、推、さ、ん、て、三、十、  
今、長、と、な、り、た、事、も、法、治、の、創、立、を、置、い、た、  
會、長、と、な、り、た、事、も、自、分、の、故、國、の、創、立、と、な、り、











明治初年  
近頃はやりもの

牛肉、豚肉、ブリツキ器、寫眞鏡、仕立物器、西洋吳服屋、馬車、人力車、自轉車少し、西洋料理、同酒類、兵隊屯所、見附守衛、新聞、鐵砲、雷管、縣々標札、配兵所、新金、金札、床見世、兩替屋、囉吧、橋高ハカマ、兩國船料理、新町屋、桑茶園、商人惣髮、カミキリ床、貸馬、蝙蝠傘、椅子、散髮、ホテル、根津娼樓、國周錦繪、イヨマサ四枚切八枚切繪、深キ陣笠

一人曳車、ジン／＼ピヤ、夏の雪、南京米、糸切飴、傳信機、郵便、トンビ、フランケット、九段上目當ドウロウ、女散髮、吉原三階、覗カラクリ、根付時計、博覽會、説教、學舎、鎮火神社、招魂社松葉亭、辨當や、汁粉や雜煮、諸商人看板高キ旗紐付の扇、短キさせる、村右衛門芝居、結城サツマ兩座、所々廣場稽古相撲、タ、ンデ仕舞切組繪、トンビ着たる小供人形、端午飾、テッポウ、大胴亂、ピイドロ障子、西洋畫額、西洋風家作料理屋、遊女屋、願人坊主跡、馬鈴薯、時計屋、懷中付木異國の草花、種痘館、橋畔の樹煉瓦石、三井組海運橋造營、ホンプ、往來の綱渡り

〔齋藤月峯日記〕

我物と思へば輕し極の棒上の恩義を笠に着て雪の朝や風の夜はそき袖寒くボリス泣く待身はつらき御給金實にやるせないわいな

退去  
す  
吹

乗客氣分

此の當時の鐵道は萬事が「ユツタリ」としたものでしたが、又其中に今日の如く、人の氣持をイラ／＼させる様な事がなくて、實に善いものであつた。今日では發車の直前にチリ、／＼、／＼と電鈴が鳴るのですが、此のチリ、／＼、／＼は何の面白さも無く、唯人の心をイラツカセルのみです。昔は實に愉快なものでした。驛を發車する十分位前に、驛夫が鈴を振つて歩いたものです。此の振り方が街頭の豆屋や市のゴミ車の鈴の様に、チリン／＼／＼と雨垂的に鳴るのでは無く、先づ最初に驛夫が改札口の前の邊でチ

リン、チリンと一鈴の間を長く間を置いて二度か三度位振るのです。而して更に驛の前と道路との間に出て、チリン、／＼、／＼と振るのです。すると驛の前の休泊所や宿屋などに居る乗客が、此の鈴の音を聞いて鈴が鳴つたからと、乳呑兒に乳を吞まして居る婦人杯は「サー坊や、汽車に乗るのだから乳をお離し」など、曰ふて、驛へ行く準備をしてポツ／＼と驛に来るのです。宿の番頭や客引や女中などの手傳ひ宜敷あつて、悠々として乗車が出来たものです。又驛の待合所の御客などは、此の鈴を聞いてから更に用便をたして乗車の準備をしたものです。(客車の中に便所はなかつた)夫れから此の鈴の音が生きて居つたものです。電鈴などは機械的に唯チリ／＼八釜數く計り鳴るのですが、驛夫の振る鈴が生きて居るから不思議です。夫れは驛夫の鈴が、サア乗車準備乗客來れと驛の前に出で鈴を振るのですから、此の心が通じて、乗客の心に其意味が通するのです。驛前の旅館、休憩所などの番頭女中な

どは此の鈴の振り方の上手下手を相當批評したものです。夫れから改札が段々進むに連れて、此のチリン／＼の音が段々短くなるのです。而して其内にチリン、／＼、／＼と鳴り、最後にチリ、／＼、／＼と／＼となるのです。此の鈴の鳴り方が、最初は序に始まり、破となり、急となり、序破急の順序に鳴るのです。此の最後のチリ、／＼、／＼は鈴の口を上に向けて振るのです。此の鈴が終ると、改札口が閉ぢられ車掌が客車の扉をしめるのです。而して驛長が汽罐手にチケツ又はタブレットを渡し、車掌に向つて手を横にして「オーライ」と合圖するのです。車掌は直に、ピリ／＼／＼と笛を吹き、汽罐手はピーと汽笛を鳴らして、パツパ、ドツタン、ガツタンと發車するのです。此の驛夫の第一鈴から發車迄の光景は今日では先づ見られぬ愉快な景色でした。今日の如く人をツツ飛ばし氣を轉動して乗車するといふ様な事が無くて、汽車に乗るといふ事が、旅行中の快樂の一つでした。

明治大正小説大觀

新文學は泰西文學の翻譯に始まり最初の功勞者として福澤諭吉があげられ、自由民權論の物興に沿つて、柴東海散士佳人の奇遇、矢野龍溪經國美談、未廣鐵腸雪中梅、花間鶯等もあるも、新文學の嚆矢は、坪内逍遙小説神髓、當世書生氣質、二葉亭四迷浮雲によつて打鳴らされ、寫實言文一致の魁となり、宛も世の保守的傾向に應ずる尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案等の硯友社の心理寫實、色懺悔、胡蝶、伽羅枕、二人女房、三人妻、多情多恨、金色夜叉、更にはこれに對峙せる理想主義の幸田露伴の風流佛、一口劍、血紅星、五重塔あり、又森鷗外、饗庭篁村、齋藤綠雨、或は傳奇的に進みて、黒岩涙香村上浪六、村井弦齋、渡邊霞亭、塚原澄柿園と共に觀念小説作家に泉鏡花、川上眉山、廣津柳浪、樋口一葉小栗風葉、小杉天外等あり、現實描寫に進み、夜行巡査、外科室、黒蜥

蝮、今戸心中、書記官、うらおもてたけくらべ、にこりえ、魔風戀風、コブシ、青春、或は徳富蘆花、柳川春葉、菊池幽芳の家庭小説、不如歸己が罪、乳姉妹等出でしも、總體に寫實的浪漫主義の域に止まり、今に鏡花の如きは特異の浪漫美を持つもこの頃より漸く自然主義の即ち人生の内面に沈潜して純客觀的描寫の風生じ、島崎藤村、田山花袋、正宗白鳥、徳田秋聲、岩野泡鳴、國木田獨步、永井荷風等の破戒、春、家、蒲團、生、泥人形、微、牛肉と馬鈴薯運命論者、地獄の花等を生みしも、自然主義の虛無的物慾的破綻はやがて新理想新浪漫の傾向を生じ、夏目漱石の超然餘裕派、吾輩は猫である虞美人草、草枕、坊ちやん、三四郎それから、門、行人、明暗、武者小路實篤、志賀直哉、有島武郎、長與善郎、里見弴、白樺派人道主義を標榜し、やがて菊池寛、芥川龍之介、久米正雄、谷崎潤一郎、長田幹彦、小山内薫、廣津和郎、葛西善藏、佐藤春夫、山本有三等心理的理智的官能的に夫々多面的景觀を呈し、更に他方無産文學の出現を見るに至つた以上縷述せる小説類は昭和の初年、現代日本文學全集、明治大正文學全集なる所謂國本全集に蒐載され、明治大正文學を大觀せんとする者は爲こよなき便益を受けてゐる。



○去る七十三暗夜縁を踏み外に腰を挫折し  
臥床ニヶ月餘漸やく床上に坐するも尚ほ起つる事  
なす能はず歩行出来ざるも尚ほ起つる事なす能  
ず歎息の聲を聞くも治癒を望むも治癒を望むも  
トゲンに掛籠し患部を揜す、果して骨の挫折を  
予思く、吾家の常世母も馬を養ふ時骨を  
挫き八十八歳の長壽を保つ、予も一生歩行不能  
終り、婦も亦然る、女もやと氣をい、遂に川山に  
八回く再安んずるを安んず、安んずるを思ふ、  
と、治癒の術を患部を揜す、一脚を患部を  
動せしむる装を行ひ、足と三十日許を治し、  
以て患部を揜す、患部を挫折の骨既し融合し、

標

を治す、初め入浴するも、特に横長の浴槽に、  
こみ、医の衣類を脱し、襦袢中にマツサージを施し、  
こみ、尚ほマツサージを約三十分間行ふ、  
の脚部迄に候死し、是より一日くもあがり、  
毛もも、  
る、似て、日マツサージ入浴をつい、  
く、  
患部の回復を、  
と、  
ある、  
理



一得乎かある、強ひて早くの結果を得るべき、是れは  
ハ海堂未とよとよ人をも、娘の友人の良人をも畜めて  
表の關係をあらわす、此の考へる、野に深切なる、殊にマツ  
サシに懸く、その考へる、野に深切なる、殊にマツ  
日本への考へる、野に深切なる、殊にマツ  
との異つて往く、無記もある、余は、野に深切なる、殊にマツ  
る、野に深切なる、殊にマツ  
一回も用ひて、熱の最中、或人と無か、此の長き病所の  
測る、野に深切なる、殊にマツ  
九を、野に深切なる、殊にマツ  
之れ、野に深切なる、殊にマツ  
仰臥天井と見せ、式十、九年の面壁、似たり、野に深切なる、殊にマツ

漢文

是る、野に深切なる、殊にマツ  
行の自在と、野に深切なる、殊にマツ  
所以、野に深切なる、殊にマツ  
倚て、野に深切なる、殊にマツ  
静か、野に深切なる、殊にマツ  
ゆ也、野に深切なる、殊にマツ  
海の、野に深切なる、殊にマツ  
か、野に深切なる、殊にマツ  
○此、野に深切なる、殊にマツ  
人、野に深切なる、殊にマツ  
料、野に深切なる、殊にマツ  
穂、野に深切なる、殊にマツ



雑誌及志、所載



藤原製

市前の政情を語る、あつた選本、選者人無関心と  
 して當時投票と町の年暮、投票日せいの年暮  
 勝手と投票と変生し或は増減すること、是れが  
 選挙より互しとすること、自治制があつた各町  
 村々の法律の解釋、甚しき故に中級、何村、  
 余の論義を聴く、今人起つ、余は其の法令、人  
 び町村の重事、立て急者の關係が起つ、是れが他  
 びる在り、加括し、中級、素朴家を包羅  
 して、政治協会の起つ、其の言、業として日本、  
 社が起つ、此の協会の一変、も同、命が起つ、こ  
 口上、地方を陰く、協会の及自由、分子を包  
 圍し、他を、地王、







○ソ聯の内情は外に言はずと接へる地位あるやうに思ふが、  
事実上ソ聯の況に支那を援けしは、ソ聯の方眼を日本  
が支那と親しむ政策に際し、其時を待つと云ふ人もある、  
或は漢口陥落の時より、公使起死の足踏らぬ、今部  
下の街路まで連日合の者を以てソ聯と親しむを疑せよ  
と公然ホヌアートを連日、母り、政府も其の疑と強め  
るに、とて、志きり、自供自足と奨励するに、軍資  
の不足、貯蓄を奨め、輸入を抑へんとし、  
の戦中、前衛隊もある、列強ソ聯を倒す、  
人、今度の戦中の目的達成、この言ひ難い、ソ聯内  
情のあるを核として、敵と交ふこと、田菜、  
と云ふ

今の戦事、回力、この秘訣、決する、  
戦洲の巧技、強弱のみ、  
長とを以て論ず、ソ聯、  
回力、上、於て日本、  
以上、ソ聯と親しむ、  
、而して、此の、  
の是、  
難い、政府、  
貸け、  
、  
自分、  
起す、





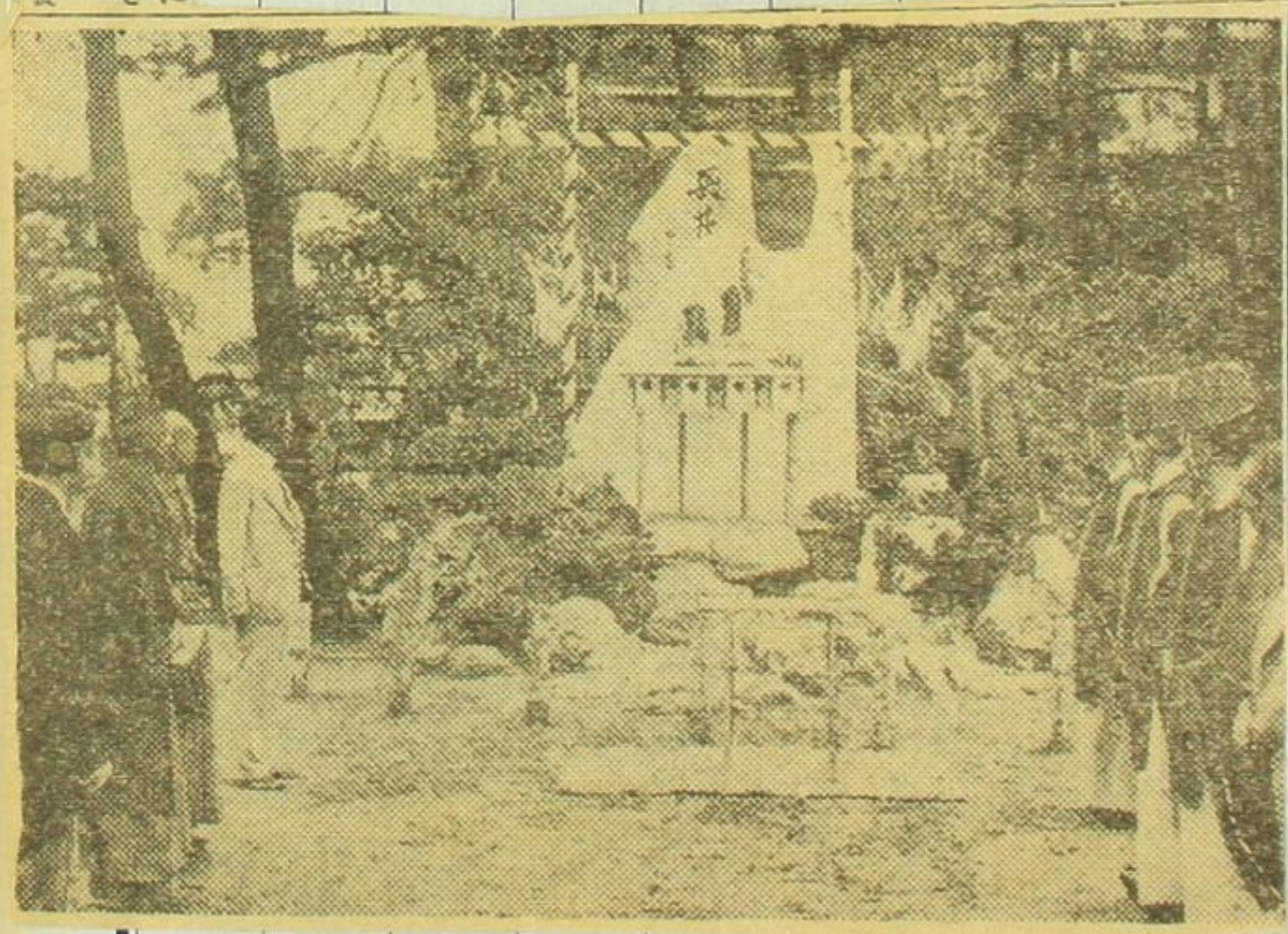








あつて、信玄に與敵牧清川とあり、北政或ハ弟の抑致する事  
 知り可く知れんと我河とを併せし新河好古雅治等  
 志願し安んずる一與と、余も其地の名邦の幅を受  
 く、(六月三十日)  
 の長井雲坪の碑四年新河白山公  
 園内に建つ云々六月廿九日雲坪會  
 除幕の式を行ひ赤紫典を奉り  
 碑面の字の余の抑 亮了了所  
 式あり余臨まざるも七月  
 前月物  
 前の際特ニ公園を新名碑を  
 一覽し、夏の日字まのもぬむ





○昨年早大の手まゆれ相馬永胤の邸は庭園の致しむ  
けも一境の境を得るうれが、偶々大改修の上京の接する大み順  
作か回遊を望むのいふ前島勘一が横矢(重さ)をいをも併  
ひる又園内を攝影せんと見界をも拓く、早大の敷地を、  
内々手前すめ相馬の邸と訪ふれ、此邸の隣地より、  
校あり又一方の満地より相馬の邸城の邸宅も、早大  
の持地より中洲系千の地を買取らん、今も聯絡する地形  
あり、昔しい法向家の三家を、法向家の法宅を、  
相馬の宅を、  
の山吹の里あり、又秋州の所産し、  
江戸各所より、  
透り、  
相馬の宅を、  
の山吹の里あり、  
江戸各所より、  
透り、

相馬

○山に入ると路の両側は、  
元々漸く進んば、  
狛の山を、  
同亭前、  
又、  
相馬の宅を、  
池あり、  
かす、  
人、  
も、  
へ、  
自然の、



のめと村を配する巧と配合して人をと快成を平心し  
とあり冬期への令と鴨池に飛来するとか道灌の操練し  
たことの時を思ふに此代此代の年すすむ政談とする  
ものあり、こも特りゆりるんや或の遊んか細行と送りゆく  
石込の河あり、こんと教訓の新録に傳る三島神詞と云ふ此  
道も三島の名あり、一夫相の天を磨きまゝのものも所謂の  
ナンジャモンジャの雲木をん或るの日生おねと伝ふかを  
かゝるもあは春秋なるまよと忠と忠と忠と此の庭  
園の長も所の自然の風情の豊かろくも在る珠の夫々の  
樹木をさるるは平大かこ、是れと海を起すて不  
可るしとせらんも、只此と扱せざる用を大切なり、此  
まゝも所と因ると風致を定るべき所、相南の地とあり、設

三島の地

計安かひ、只此を保護することを得んか、大隈公使の庭園  
も美観するも自然の趣、及く富も一畝の心算る此庭に  
一善を齎すも、似たり、一時河ありしも大隈と見え、出で、  
高田の馬場の堀部の建碑をん大隈公使を傳ふ引換  
手紙をきつてしぬる。(此の十三年七月一日記)  
〇梅の研究の権威と稱せしめる三島の海士の此書  
梅と親溪も一二のノートをおす、

梅の愛する者、梅竹中、納言が梅を愛する多く  
昔はかゝる京都、後梅、其の末、山、新、梅  
の壽命三七の長くすること、祈つれと云ひ  
ぬるる  
梅の愛する者、昔しの方か多日かつれ、池つて



多くを集めたり梅謠を心へた人七宮守り芳人  
あり此内若若なる人が二人あり即ち一は市橋星  
峯一は三十三種集めて板井雪軒が書いし  
る、**④**星峯は近江の仁正寺の城主が谷を長  
昭と号し仙居一宿のつ人である。

他の一は飯良山が二百五十種集めてゐる、此人は信州  
須坂の城主が**梅謠**と梅花謠を著してゐる  
この二文大匠である。

以上の如く多種集められたる皆不徳の故びいろ  
くの梅花謠を傳へてゐるのを、以上二花謠から由  
来してゐる、今傳へてゐるのも此二人の集められた  
傳へてゐるを、之を傳へた板木庵の出来の事

木橋右エツのことよみである。

日本の梅は山さくらと梅の芳しからあるが或の  
植物学者は他の梅を里梅との名を下して  
山さくらと区別してゐる。

芳しの人へ事実花を賞讃し各種のことが  
多くを記し、芳地も芳くゆき其の語美を力  
めて、漸人に株を買はせを其の植へたことが、此の  
序に記す。

支那は梅の者多し、就ては四川の如うの一局部  
にあることが知られ、また日本の梅は、**Prunus**と  
名のあるものと云ふので、あつてはマウヤの  
梅の方が傳へてゐる。



日本から米國へ移るに極の園丁が三度遊んで帯  
て貝がら虫蝕と採取して長くとるの日本産の  
長つらを一方向印してあるもの四角より長  
り冷淡と云ふ。

里極の群衆を集つてある所の山崎川堤がある  
研究材料としていふが大切と云つた家の  
そのをみる、白石樂おのるむおのたう多く、  
極の向上性のあるものや文生の極の親樹よ  
りも後つてあるから、あつた極が生長する  
ことが日本の極の二特徴である。  
極の短命であると言はれるが、その事やその  
日本在来の山極、彼岸極、枝垂極の生長の

極の生長

何のよも長命である。山極の大木は、新多野村  
の下馬極の群衆の巻狩時代の遺木と云  
ふに在るとき時代のものや、疑はるる。又日本  
最大の樹木として知られる山崎山崎の  
神代極の幹の目ありの円圍が三丈五尺ある  
つて、大木と云ふに非ず、日古い。又福島の五  
春の流極の三春城に在る深二丈八尺二寸五分  
七寸あり、三春の城に移つた古の既入大木  
の幹の目ありの長さは、北極の地上五尺の幹の肉  
圍三丈、枝垂極としてその最大樹である。  
以上の天然記念物と指定された巨木の群は  
属する。



天然記念物と指定せられたる木の内のたけの木の  
梅は二本あり、一は梅庵寺の珠殿にあり、二は  
北條原野にあり、一は新宮町の霊木として  
あり、二は里梅のあり、三は又東海を平上修村梅  
庵寺の野中梅、一は山梅で梅のて大輪の花柄  
あり、二は花径が二寸の連する

佐賀後深井寺の梅が東家如法の方へ梅  
かつたか、いふに梅庵寺のあり、また、今死す  
梅といふ、つたか、いふに梅庵寺のあり、今死す  
か、いふに梅庵寺のあり、今死す

梅は日本内地のあり、所々あり、又梅のて大輪の花柄  
あり、二は花径が二寸の連する

梅原製

梅は日本内地のあり、所々あり、又梅のて大輪の花柄  
あり、二は花径が二寸の連する

七月三日記

日本の梅の名所を述べ、梅庵寺の梅、東家如法の方へ梅  
かつたか、いふに梅庵寺のあり、また、今死す



堤 東京府内堤の保にふくまぬ板がある

以上の如く規模の大きき列をもちて、或も谷の  
のいふが天然記念物として巨樹指定と  
此巨樹の故のありて其数も少くともいふ

梅の産所の内一二を就て大略の説をもちて先づ梅

川の流域、或も東那珂郡破新村である。此梅は古

くいふが、或も謡曲「梅のしるし」の七段が唱つてある位は、或も足利

時代からいふても、或も但し数に限りなく無い

梅の家の梅は、或も仙臺市に在りて其の美彩を放つ

つ、或も波岸梅と枝垂梅の大木の多いことと

見録の以伊豆道徳村の植えられたりし

實御々谷の梅、或も改年給美濃指美郡木野村

美濃指

大字名代の池の山のふもとにあり、或も即ち美濃と近江

の回境の山中にあり、或も此地に梅は、或も魚ととも、或も山

のふもとに、或も梅の産地、或も山梅と枝山岸梅のふもと

あり、或も並樹をもちて、或もこの所は、或もトシ子にありて

あり、或も近きありて、或も近年漸やく名が知られ所

にある、或も古に梅とあかぬ年と天の二年のあか

銅留があらはれ、或も樹木が、或も生茂り、或も梅の大

木も、或もあつたが、或も留山の林の刻が、或も地人の、或も豊成を

ん、或も天二十二年に土地の存子が、或も更生を圖つ

た、或も此と

美濃川堤、或も東京府南足之郡江北村に在り

て、或もこのとき、或も豊梅の名種か、或も多く、或も種をくち























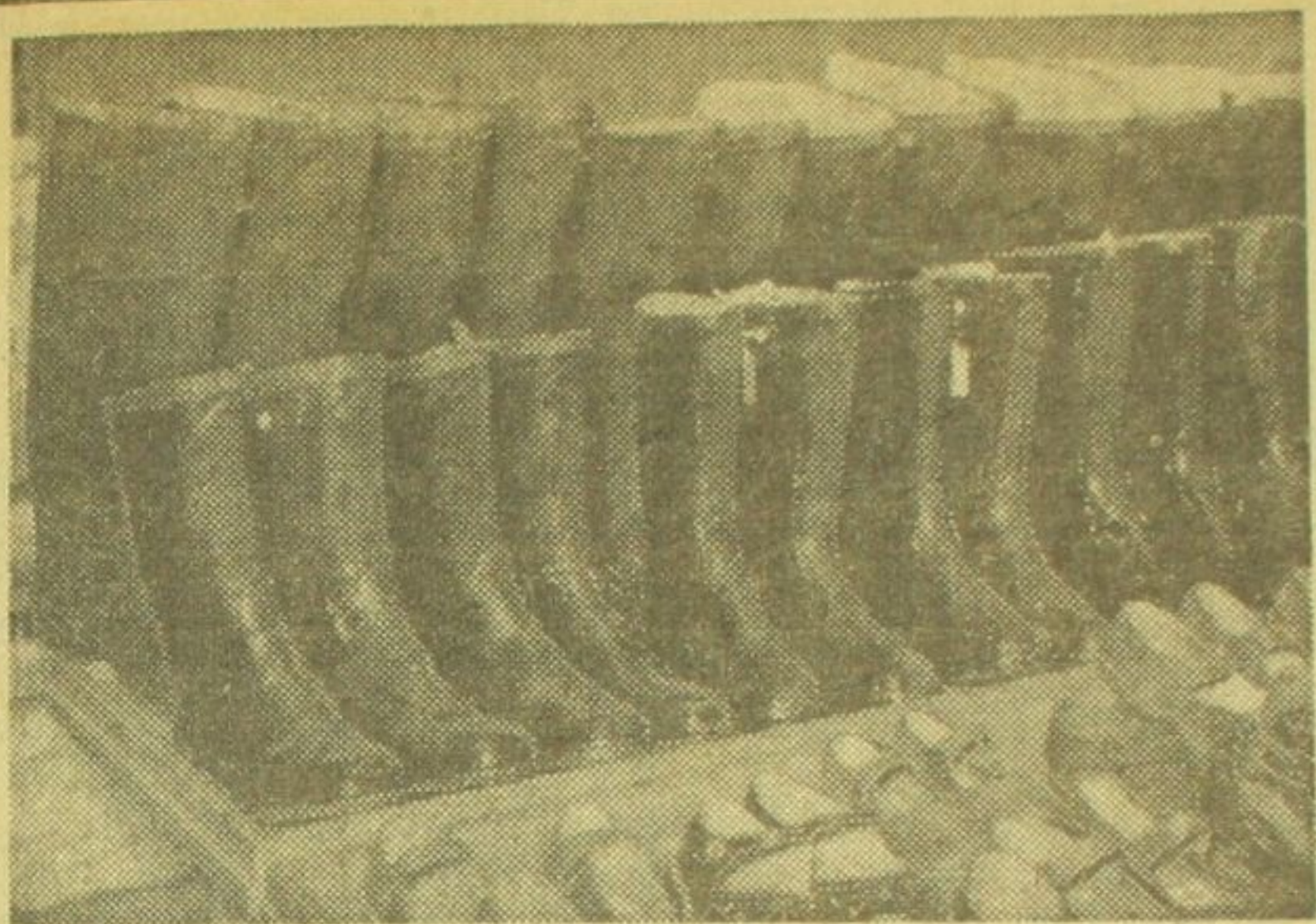




# 姿消す魚河岸名物

## 雪國の小學生はお目こぼし

### ゴム長に法の温か味



て店某の谷造＝命壽の靴長い細心に頭店

ゴムの原料はすべて外國産だからこの民衆向きを節約して各種機器の製造に用いられるため第二面記の通りゴムの使用販賣の制限が九日公布されるがその影響を拾つて見ると――

#### 庭球

庭球のゴムボール(軟球)は特に文部省と協会の上下小學校、運動會等に最少限度に供給することになり

地下足袋とか工業用ベルト、自動車、自転車のタイヤ、醫用ゴムは國民生活の必需品として除外され、また靴の底ゴムも皮革の禁止の代用品となつてゐるので禁止外におかれた。目下加工中のゴム長、ゴム靴は政府の指定機關が買上げるが、それは北洋漁業とか、製糖を用ひる工場のみで供給することになつてゐる。子供用のゴム長は雪國の農村の小學生だけに供給することになつてゐる。このやうに今度の禁止令で産業方面と社會政策方面を考慮に入

れたところに「法の温か味」がある。一方魚河岸名物の

魚屋 さんのゴム長は既々姿を消すことになりいせな魚屋さんの音に立ちかへるのだ。ゴム長は農村でも使用されてゐるが、これを自給自足の靴、雪國の靴を使用させるのが主眼だし、また都會でも大人も子供も出来るだけ下駄か足駄になるといふ、然しこゝ一年は十分ゴム製のストリッパがあり中でもゴム製靴は百圓足のストリッパが靴の専門店にあると當局ではいつてゐる。

等十三四日又取  
飾りの失ふお出れ、便  
格の取締りある、往  
巡査の金、活動も娘  
め、價格の取締りや  
中え孝の即れか、取  
美るる差ある取

藤原製靴

# 集まつた「一戸一品」

## バケツ、洗ひ桶等が最も多い

### 事變記念日の獻納

#### 家庭協力の

事變一周年記念日の一戸一品献納運動は全国的に華々しく行はれたが、東京の國民精神運動員中央聯盟に寄せられた全国各地からの献納は何れも好成績を傳へてゐるが記者は七、八の両日東京市中を一巡して一戸一品献納運動の現場を見た。どの町會の事務所も最も多く集まつたのは、バケツ、洗ひ桶、櫛等のトタン製品

事變一周年記念日の一戸一品献納運動は全国的に華々しく行はれたが、東京の國民精神運動員中央聯盟に寄せられた全国各地からの献納は何れも好成績を傳へてゐるが記者は七、八の両日東京市中を一巡して一戸一品献納運動の現場を見た。どの町會の事務所も最も多く集まつたのは、バケツ、洗ひ桶、櫛等のトタン製品

【写真】上から献納されたアルミ櫛、中が丹念に纏められた銀紙、下は銅屑、水コンロや手洗ひ龍吐器等

と愛も、婦人のダンスを禁止せん、ダンスホール  
の運命をいふべし、日本をえんるも、永久に不愛ある。  
バットの代の吸口も省く為め六十萬圓が浮くと云ふ。

のキヤップがバケツ三杯も持つて居り、吉原附近では赤の十能や

#### 火鉢の落しなど

二三見えた、産橋の方では子供が丹念に集められたら、煙草の紙を相當大きなボールにして献納したものが多い。多く見受けられた、更に青山方面のお屋敷町ではベツトのスプリングとか、ストーブ、電気アイロン、眞鍮の消火器など相當金目のものが出て居り

中には未だ十分役に立ちやうな銅製の立派なヒノシを出してある家もあつた

大東京の町数はざつと二千四百といふが大體現職巡視員の推定では二町五十區以上と見てゐるから東京市内だけで此日約

#### 十五萬圓ぐらゐ

取引の済んだ浅草區石橋町の二百五十二區等は優秀な方であらう。男は外、女は内の効果 今回の一戸一品献納運動では町會員、在職軍人、青年團員等數萬人が献納品の買ひ受けに廻り、婦人會や國防婦人會その他婦人團體等婦人の方々は家庭にあつて献納品を探して出して、よく働いて貰つたので、好成績を収める事が出来た。従來この種の運動はみなが難然と街頭に出たため却つて豫期の成績を収め得なかつた事が少なくなつたが、今後各自適當な部署について奉仕して下さる方が、遙かに効果的であるといふ尊い經驗を得る事が出来た(東京市總動員部長談)



楓の市塵の空を集め、ふんし初めの試みは、北の塵の空を  
後ん心ゆの葉の目と云ふ

○夏目漱石の句は、氣を吟つれりて天籟と抄録す

まゝいさや裏の鉦うり光琳寺

董不い●ふふささき人れ生んや

あうさまの庭を伏せし橋は

いとつらぬあさきつゝん故郷は

月々行く漱石を忘るや

某のあま山ふらへ後春との

ある時の新酒に酔ひて悔多き

朝寒み夜寒みいさう行く旅を

の天子よとあふゆの古樹を



寒山か拾得か蜂に螫ん

無人島の天子とるゝの凍りかろ

作らばと菊咲けり折りまけり

法衣いばぬと夏の椿を

風を来て軽くのり行く旅を

行春を琴撥きつゝり捲き乱す根志

忘れかかぬの聲もあ打つ情志

え送るや夏の湖のいれくれ別志

唐えわら一枚の山や秋のあ

○北の空甲の占據は湖の支那の空の衝かみ海の地と  
しるも空の空のあつ習俗があるとも支那の空の空のあつ



湖口綺

江西省へ進出した皇軍は湖口を占領したと報道するが、この分ではゆくと九江の陥落も目撃の間に追つたので、鹿々瀨口も風前の燈火同然だ。

湖口は古昔から現今まで鴨脚船婦と云はれる女白賣買が盛んに行はれる土地であつて、これを童養婦とも呼んで居る。子供のない貧しい家では金を溜めて、他家の女兒を四歳位までの内に、三四十元位で買つて来る。そして生家とは一切親子の縁を切つた契約書を差し入れさせ、その童養婦の父母の自由に任せることになつて居るが、もしも男兒が出生しない場合は、買つて来た女兒が二十歳前後になると、相當の身代金を取つて、他家へ嫁入りさせる。

外の男との關係が生じ易く、十人の内の八、九人までは亭主でない男の赤ん坊を生んで居るが、この際、土地の風習とは云へ、少しも妻である女の不義を追及し、責めないことになつて居るので、生れた兒女は十二三歳の亭主の子として、當然認めて居る。

この亭主が長じてゆくと、三十三歳の父親に二十歳の子息といふ珍現象も少くない。童養婦の娘が年頃になつて、その家に男兒が出生したとなると、これは一層明白い奇現象を呈して来るが、それに就ては左の俗談が充分にこの間の消息を傳へて居る。

十八歳の女房に赤ん坊の亭主 毎日毎晩、床の上へ抱きあげ 觸つた夜半に、乳を欲しがり 顔をびたたくと叩きつけ お前と夫婦で、お前の母親でない お前の両親が私を大切にしない といふ お前を床下へ蹴落すよ この外にも、もつと怪談な俗談が

唄はれて居るが、それは一頭高く、一頭は低い 唄は年頃、十七歳 四年経つたら二十一 亭主は漸く十歳で 女房が十一、年が多い

或る日、井戸水汲みにゆき 唄が私を大切にしないと お前を井戸底へ突き落すぞ 次に唄か怪しからんのに、十八歳の女房に七歳の亭主、銀燈を點して床に上るが、郎の小を蹴つて云々など云ふものもある。

中には、四寸の袍を着ることも出来ぬ上に、二寸の粗子が鼻まで来る。黒夜、刺繍した靴を脱いで、床に上ると……と云ふ風に、性的關係の不能を諷へた唄も澤山にある。

こんな風に不規則な夫婦關係が普通になつてゐる上に、すぐ近くの九江、こゝがまた淫風が狂に吹き捲つてゐる土地であつて、名物が私娼窟と秘密の阿片窟、花柳病患者の多い統計でも、支那として殊に有名である。

○廿田ヶ谷の親 族の葬儀に臨 人比序、如も 松陰神社を 行し、此迄、 八ん色曾る 往ルことかまひ、 神社の若林町 二ある、境域 千坪弱、如 ともい坊不 がある、こゝを

毛利家の別業大夫山々各地に、自然の杉林のありて風致がある。及び、秋、新入に去る杉林三樹未奈未花福在七三進等、最初の子位のか塚原の利坊、埋のえれりも、文久二年、朝令、より家名を陰か、の三年此地に、改葬せん、ゆ次十五、毛利公葬、杉林門下の土葬時、神社を設け、是が此の神社の現存也。府社に列せられた、今の境内、毛利一家の献燈、其基が歸せし、社殿其他七昭和二年、改築せんと、五派のもの、こうころ、松陰も長妙、國藩湖久、杉林の松下村、か、佐野の大書も、賛、裏に、士か多く、誓、出、これの、斯の特待を、受けて、みる、こととを、考く、ると、人、可、幸、不、幸、か、ある、と、坐、る、の、感、せ、し、め、れ、佐野の志士、杉田松陰の、か



かま行を極断するも定ぬぬるも長曲明に属す一とすけん  
神を祀るゝこと無き。

○北吹無聊を因つてある或る日有閑人が訪ねる来れば例  
る長く引くといふ所の法活の時を後したか案の言ふ  
る人貴かひ多味味の人か何か小説聊本の類を一作やんれ  
らうかとも真面目に言ふのい自今に笑つて自今に笑んか  
筆を持つてゐる。志がく小説や脚本の程を持つてゐる  
もろのといふのを是れ少くせうとまのい自今に降ふ  
し入出難目の依り漫談を試みれ。自今に昔年放すの  
皮切りれやつれのか尼寺東慶寺のこととある。あの放  
送下れすて定を小説か聊本をいれらうかと思つてあれ  
のいあの時七流を持ていれのあるか今も同じをたをてつ

長曲

しある。鈴舎の東慶寺は今の荒ん果てて堂宇の幾んど  
方七まのいか當るに相高のよむ皇族の女性か其の任職  
あるに關係の起法権の特異の特権がある。北尼寺の遊  
たる山人に教へて三年経過する。いんる昔年の田東ま  
身かむ七流の身とまると才三流のたふのともする。ことか  
出来るいこととまるとの。是れ所の頼と娘と千姫の生  
人にか七北寺の任職とまるとのことかある。只の關係の特  
権か命と確保まるとい人が考へ江戸時代への影響と宛  
けにむか人があつた。最初の有田の儘かくまうれば  
ことと髪と刺と任と漢まるとやうなうらまを二重の  
あつた當時山人の遊難不とくか北寺の千姫が人  
像も前身と押し足利某寺のい無のつれのひある























































其味を思ひ出し、この一冊の本を多くの人に読んでも、後人が見ると、  
 自今より安んずる面白く感じよう。

- |       |              |         |           |
|-------|--------------|---------|-----------|
| 幸田露伴  | 文博士院藝術院會員    | 牧野夏三    | 衆議院議員     |
| 徳田秋聲  | 作家 藝術院會員     | 小宮豊隆    | 東北帝大教授    |
| 徳川義親  | 侯爵 貴族院議員     | 富安風生    | 元逓信次官     |
| 小林一三  | 東京電氣社長       | 山本實彦    | 改造社長      |
| 赤星水竹居 | 三菱重役 俳人      | 安部磯雄    | 衆議院議員     |
| 入澤達吉  | 醫博 東大名譽教授    | 大森洪太    | 司法省民事局長   |
| 桑木嚴翼  | 文博 東大名譽教授    | サトウハチロー | 作家        |
| 里見 淳  | 作家           | 平田禿木    | 英文學者      |
| 辰野 隆  | 文博 佛文學者 東大教授 | 市島春城    | 早大名譽理事    |
| 安倍能成  | 京城帝大教授       | 針重敬喜    | ローンテニス社主宰 |
| 吉屋信子  | 作家           | 藤原あき    | 義江氏夫人     |
| 水原秋櫻子 | 醫博 俳人        | 板倉卓造    | 法博 慶大教授   |

- |        |            |        |           |
|--------|------------|--------|-----------|
| 牧野 富太郎 | 理博         | 小杉 勇   | 映畫俳優      |
| 土師清二   | 作家         | 藤田嗣治   | 畫家 二科會員   |
| 中山晋平   | 作曲家        | 平塚らいてう | 評論家       |
| 齋藤茂吉   | 醫博 歌人      | 宮城道雄   | 作曲家       |
| 林芙美子   | 作家         | 長谷川 伸  | 作家        |
| 室生犀星   | 作家         | 秦 豊吉   | 東寶専務      |
| 石原 純   | 理博 歌人      | 尾崎士郎   | 作家        |
| 與謝野 晶子 | 歌人         | 中村吉藏   | 劇作家 早大教授  |
| 木谷 實   | 團七段        | 川上三太郎  | 川柳家       |
| 小松耕輔   | 作曲家 學習院教官  | 内田百閒   | 作家 元法政大教授 |
| 徳川夢聲   | 漫談家        | 長谷川時雨  | 作家        |
| 久保田万太郎 | 作家 放送局文藝課長 | 下村千秋   | 作家        |
| 岡部丹虹   | 鮎釣研究家      | 馬場恒吾   | 評論家       |

自今より安んずる面白く感じよう。

の味を思ひ出し、この一冊の本を多くの人に読んでも、後人が見ると、















大工の鉋を遣ふには、あらしこ、申しこ、上しこの三つあり。其の稽古をするに、先づあらしこを遣ふに、は、體をかため、腹を張り、腰をすえ、左右の手にひこしく力を入れて、荒けづりをする。つまり總身の力を込め、骨を惜まず、十分に働かざれば、荒けづりは出来ぬものぞ。次は申しこなり。申しこは、只だ總身の力を入れし許りにてはならず、おのづから手の中に加減ありて、平かにけづり、凡そ仕上の小口となるなり。されど荒しこの精神なければ、此の中しこの平らけきとなることなし。それより、上しこの場に到るに

は、申しこの平けき上を、又むらのなき様にけずるなり。それは一本の柱なれば、始めより終りまで、一鉋にてけづらねばならぬ。柱の始めより終り迄一鉋にて削るには心を修むるを第一とす。心修まらざれば、種々のさはり出来て、むらとなる。むらとなれば、仕上にならず、こゝが大工の鉋を遣ふ肝要の所なり。先づ心體業の三つが備はらねばならぬぞ、心體業とは、鉋と人と柱との三つなり、人がけづると思へば、鉋がとこほる、鉋がけづると思へば、柱がはなる。そこで心體業の三つが備はると云ふは、鉋と人と柱と一所に

働らく所、是れが手に入らねば、いつ迄大工の稽古をして、柱を能くけづることはならぬ者ぞ。柱を能くけづるには、初め荒しこを遣う稽古が第一なり。是をよくつかひ得れば、申しこ、上しこを遣ふことが出来る。されど、上しこを遣ふに秘術あり。秘術といふは、別のことでなし、心體業の三つを忘れて、只だする、別の所にあり、これでこそ、仕上が出来ぬ。其の仕上の鉋と思はぬ所が、秘術とも何んとも言はれぬ面白味がある。是を學び得ねば、何を言つても無駄ごとぞ。上しこの手の内は自得でなければ、如何に思ふても傳うることは出来ない」と。

心があつ、果はカンナのみを  
くちあつ、果は術まことんが  
與けの成切といふんるん  
の心ある。

○防共及共の法四人が折るて四段の市士登山を公  
絶山鞍、防共の折言を日とせれこより此の法を出来ず  
てある。此の登山こそ六根清浄の善意の山、世界の予  
和を企圖するの折言と云つる人此の神聖の山を措いて地  
所が無い。登山を向の記す人、折る法、由つて巻尾に收  
められ、是れを記す人、此の重なる七未足、其の心  
自今より久しく其の折をわづらひと思つてある。世の  
各所の要あるを云ふもの、多く迷信の手係つて不純の  
よふが十中八九を占めしめる例へば、眼疾に効能のある  
薬、其の眼を○を渡す為め、痛毒が丸を汚して  
毒水と云ふや、其の多いいかにある。市士の金銀名







軒はすゝみの雪見けてかろし

よしの雪道のいせしとる雪見まころふところまかとも  
ちぢつとりのかろし

凡雅の節の各句雨と雪

雪道の雪の句とつ人其角のるもの句と併せて誦し  
たのこま

東山よきるるすきと句を誦す

まの東山かと老の戸をよき

ハ眼都筑雪の蒲団きて寝る姿の東山と誦んぬ  
よきよきまの夜着まいぬ東山ハまか寝ては  
つかの老いある

各句の句末の布団か蟹の蚊帳

前句と蟹千代の起きとえつ寝て居る蚊帳の房をこころを  
併せて扱へばある。外

だ、古い蚊帳ハ凡雅の後家二人

後家の名は蚊帳も古い句あり

も寝るもの。千代の朝魚に釣瓶とんて貰ひぬ  
をたの如と取換るある

翌年の千代井戸端をよけて植る

秋色が上望む井の端の梅危し酒の酔いを詠ん  
ゆきの千代とを併せぬ梅あり

井戸端と釣瓶に雅めの二幅對

がある、又秋名の句を添へし

井の端の梅とお秋名か



生研が末ぬと名の無の極さう

中三の春十七の花を幾し

秋色の香向の着の極の秋毛極と名の付るはこと秋毛が十  
三山蔵に十七字を採ると云ふの意也

まや山十七字かひはけめやとぞ

ハあふら意の「いん」くとはけり花のまや山」の十六字  
の原作を皮肉へるの意あり又

夏室のまよふ七一字是と詠み

とちのハ依田四葉六が「まや山花まるころの朝えく心  
か、さ峰の白雪」を併せ採ると此の初字「一字」の字の  
誤りあり

〇横尾大関以葉山を出しは量後の大分ハ、元分二年ハ物

見山園長の無双の力士を出しあるハ、唯川谷の生れ  
ち目下洲山と云ふハ、敵争の嫉妬の着のまよ殺せられた  
大分のいんも「字」を採れば書法中、此の力士の女徳  
をねむ、又「あ」の字あり

力士は見山始り根ノ金と稱す和行は流大分也

横田郷宗方村農夫也切も「力」人「さ」くも

る、及び容態魁偉、身体肥大、女人ハ尺有餘、十

六斗の時、高殿を著け、米四斗（細斗、精斗）とお

握りし、隣里を推し、常人の歩の「さ」も異

なり、壯年、及び、力、強、く、田を鋤く、鋤

二柄とお手も、取、も、左、右、一、齊、に、鋤、く、深、刻、の、間

數十歩を終る、其、さ、ら、及び、鋤、を、土、中、に、挿、入、し



僅に柄頭を餘し人々を板取す法あり一日禁と  
又駈し牽て村路をこぞ偶々隣藩府内差某の  
巡りて遇ふ前廻之を叱し退かざる同花赤色  
自若牛の四脚を双手に執り抱きて路下の圍に蹲  
まゝ遊く府内差之を視大に驚き其卒死  
力の振舞うるを感し笏を揮りしりて見し之を  
賞す同花之を角能の技と志と云ふ時人  
亦其力の起凡るるを知ると云ふ

同花大改の天湯角能坊、大関梅ヶ崎、外ヶ崎若  
を敗り又京都の祇園で大関塚の角能後の秋津  
崎を敗り遂に日本一の名をゆるり落収差の大関相引  
と相引又勝つ而して娘婿の為め相引と云ふ殺す

寛延二年十二月廿二日

〇玉湯所が盛んであつた深川の角能梅ヶ崎百歩梅ヶ崎の  
料理屋の角能梅ヶ崎は平清の母と云ふ川柳の極  
平清を利かたといふ

清く盛る料理土橋の平家也  
平清く振く目の出る流行り子  
平清の奉りの子七うしは也  
娘の七平は平清梅ヶ崎の大奉り  
平清の母の休養所の祇園梅ヶ崎  
左の平清の母を賞し川柳も  
梅ヶ崎の矢の的八百歩の梅ヶ崎

養由基百歩の梅ヶ崎











今を開く、今物三四名を容るゝ是又支店長青田定  
后余の過して今世の命名と云ふ事共終る事と云  
つゝ、日余海濱せざる三時間有海あり、野口多内  
需め、信り自動車に迎へん、多内の岳(信と木村別所)  
を訪れ、多内の山、新築す所あり、多内余が門下生  
より久しく支那に在り日本人今長と云ふ、頗り支那後  
二過生、西三身前帰農して田宅を改定し、信と甚た  
美也、宅地の境、教の海をあり、希賢書院と云ふ、  
多年余の終る、湯物出土の魏碑、法帖、篆、籀、  
楷、四子、目録、本、覆物、六冊を以てす、其、政、房、  
予、後、海、多、澤、具、の、書、の、重、面、に、魏、碑、と、録、し、以、漢、  
帖、を、贈、る、こと、を、得、す、こゝ、余、の、死、後、書、の、可、ら、す、こと、あり、

之をも、割愛す、この家、永保を期す、の、書、を、出、つ  
偶と、実家、こゝ、土、田、更、大、り、市、を、訪、ひ、来、り、松、う、崎、治、の  
碑、一、を、一、覽、せ、り、と、ある、の、は、と、治、の、但、今、の、一、人、兒、玉、某  
と、共、に、動、動、の、り、と、云、ふ、野、口、も、も、帯、田、建、碑、地、に、  
つ、こ、ふ、す、別、所、の、約、三、十、人、許、の、も、連、す、次、の、開、つ、の、  
所在地、大、碑、の、建、ち、ある、と、云、ふ、前、月、陰、祭、の、式、を、行、ひ  
し、時、余、陪、心、能、い、り、り、と、云、ふ、余、の、撰、む、に、信、の、也、  
松、本、七、八、の、も、れ、に、未、だ、見、る、こと、あり、と、云、ふ、一、見、を、欲、し  
り、り、と、云、ふ、碑、文、信、字、數、六、を、數、す、字、刻、淺、く、不、出、来、る、ん、と、  
信、の、仙、甚、だ、い、し、野、の、身、豪、壯、の、氣、漲、り、し、と、云、ふ、碑、を、  
こ、村、を、往、之、北、邊、の、分、園、と、す、す、針、意、と、す、と、云、ふ、一、見、  
と、云、ふ、田、の、畔、に、校、友、今、の、合、儀、ハ、五、時、と、北、辰、終、り、



とくを免るるに序を十数あるに及ぶ此に於て未嘗其の盛  
也、今改めて話論あり指名、推薦校友を決し、未嘗の合  
ハ外野郡、開くは決し、字名を移す、此の字名を校友の回  
試考するに、序を以て出序あり七十一名、序を以て、余序  
上の撰り千金の年齢八十名、序を以て、未嘗の出序  
為し難く、弱きを以て、序を以て、校友の或る者、未  
嘗有の悪演、序を以て、序を以て、北日新、序を以て、七七の校友  
未嘗、宴果、序を以て、序の校友を以て、新、序を以て、新、序  
の序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
友の余、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
撰り、北酒、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
の序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序

歎きも巨構也

嘗てある事あり、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
未嘗、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
世中、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
まゝ、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
一、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
序の、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
親戚、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
お、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
ら、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
余、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序  
と、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序を以て、序



考籍の既読もいよいよお終りなりと、  
 馬の酒世に、春の梅磨の敷るるを、  
 一実す、十時校友の迎へ、  
 一校友皆今も、今飲三時  
 間、  
 就、  
 七月廿六日記

煙の空の翠峡、星の暮火、  
 浪未、倚船、  
 承向吾名を得、  
 妻が亭主をもてなす、  
 わが家の美酒、  
 美點や釣るぬ柳く削り行き

# 妻が亭主をもてなす

これがてきれば藝術だよと

早大名譽理事 市島 謙 吉氏

後続の夏期大學  
 座講りどしを  
 合場のみの酒が夫



（後を承る）

といふが、これア、その人がどう  
 かしてゐる。酒飲みにも流儀が  
 あつて、食ものをやましくい  
 ふのも一風あるが、實際いふと  
 食ものはいらぬもんなら、  
 酒飲みに、  
 お妻や、  
 亭主の聲が、

夫が、  
 妻が、  
 亭主の聲が、

おいといふは、自分でつけて自分  
 飲む。酒は一家の心持をゆるめ、  
 そして、酒の心持をつけるもんだら  
 うと思ふが、のんびりする氣持  
 を、一層助ける酒でなくちやなら  
 ン。これが、  
 亭主の聲が、

自分の家で、  
 死んだ下村親山は、  
 一週間にわたる沈黙する癖があつ  
 て、  
 酒をすゝめ、  
 亭主の聲が、

市島謙吉氏



此川柳花柳の可笑相をよき字のてみよ

蹴月の左の三首巧を弄せざる所は印も味も乏し

おみやや一厨の鮎を炙く句の

瓜揉みは目送る一陶の貪楽一

運雷の養平然と石の上

客子の句に「餘の舌曲り入りな花の志」と云ふはあゝ織

細の描寫画工及んす

新酒の錫茶屋新築の一室の欄間ハ彫刻の代ハ銀

十数枚をもちあはハハメコミ等を又る。廢物利用の

風と書きとめおん

○後更の形は敗れ余の法派を招く。即ち前切板を貼

付するものなり。予の從法を記す味手ハ

長の通せしもの一夫を折あはれハ予家産ハ柳の

と事とすもの。徳封の柳の予百の行跡を任じ内

子病状あり、長火鉢の一座を

獨の家ハ月寂夜ハの感なきを湯丸珠ハ麻糸のハ送

河の未の時刻ハ旅旅魁而の時ハ存ハ治養の時間ハ

時間ハ往々二時間ハを

此間屏息ハ杯を舉ぐ

亮ハ酒を盛む七の如し。獨の家ハ柳世ハつらきものと

感ハなき此の内子漸やく回復未れまハ

ヤハ七、旬旬ハ七茶のるハ歩を移し湯ハ

魁ハ良時漸やく長火鉢

興ハすことと湯ハ旬旬ハ杖解ハ横行ハ似ハ

の歩ハ及んハ及ハ



きりの電氣とけり訪賤も兄も三つて歩かざるも  
しりぬあそび歎  
七月二十日記

○赤田其江の除夜の律詩一幅を贈るよりの書  
一在御後の日の作也、蘇山に字ありと後漢の文あり

其人未だ洋からず人但し酔舞の御後の俗後引と云ふ歌後在る中  
一は哲白の友礼如蘇山蘇山年暮る蘇山映硯池破壁寒

多星月射、秋の露雪壓竹枝、空知難懸  
恰今酒室到、塵清初祭詩、桂柳梅如共踐

陽和日待凍融時

歳杓書下蘇山之を贈酒監酔舞五六及之

吳江 空窓草門口

○徳川時代には馬鹿が夕儀礼が多々ありしか、就中馬鹿  
がなまの献茶の道中、陽礼にありしか。幕府に献納す  
るよりの御前の奉仕儀、御後の墨土志等があらうと献上  
しつゝそのと女に連立方か無やむ鄭重に取扱ひんんが  
其中むと奉仕の献納書の中、敕使の冬向や大名  
の冬勤交代らうよ市大祝せしん、茶事あるよりの沈香の  
掃除いふ論非等敬告戒を、露掃と唱ふる人足を下  
切し下下兵ろくと世来と叱喝し又病人を破り物ごと  
脱かせ、日又下下をてしめん。

茶の巻産地さう宇治に柱を献茶を司る茶師と唱ふる代女  
頭取格のよふふありて、まんと上無業と云ふ切の並る名を回  
世に頭取の三つ名切りのよふふありて、此の家が京都の所



















一高野のテリブルラントが流石の巻を拜り空海の遺構を又と佛法の尊厳を感じ

一市士其他の城山に登り又別府の温泉を浴び

火山園の真相を會得し

一お郷香取鹿島を浴び坂東太郎の威光を感

をり

一山陰の穴道湖秋田の十和田湖等とて湖況の美観をまき

一鬼澤の大方の日光の華表を推す幽邃の堂

ろ伊賀の赤目の流を推す

一然谷の星大の十和田の を推す 雄大の城中

の黒部とす

一即鳥渡に於て此の川がとらふ全木踏及せす

一田畝の平淡山の雪原の故後を才一とす

一秋田の森林美の木曾の足目に表す

一長崎の黄葉法利と南蛮風味の奥を

感

脚を江戸をきし遠春を求めた如き飛脚の酒を沈湎し大切なお世を何れか置き忘れたるの重臣の歎と自殺をちんこし橋守のあふ。自分、関所制がまゝの魚味を感じ常の脚の味納べれことすある。保し自分のかの次十平の流る政の関所の病をん之れと通る。此年、関所地方に往給のちんこが似れやうることある。此年、関所地方にコレラ病が起し、関所をもちあふ入るとして、関所をもち三日の滞在を命じ、即ち関所を原が臨時







の箇所がある。自分等が来たところ、遠く北の地方、  
病に尺寸を履人が居らざる。まんと押留するの女を  
得ると去りて、郡役所が争ひ、一紙構社の帳面を因西  
説者の証印の與いのと証しとヤト押留を免かたが、  
ハ病毒地か、こゝに未だよと説者と同めして滞在する  
ことが甚だ危険である。極力争めて深更に友人に  
がある。吾等が戻所はコンナとある。これこそ  
感一北の時であつた。此の事件は、其等の京都に向ふこと、  
未だ國ヶ谷と中山道と廻りの共と由長ら  
此の二節、昔の北の内、叔父のききと  
漏れ北の、補筆する。此一頁  
昔の北の末項に入つて

○、皮の皮の葉骨の葉とよめ法がたのく、  
行いんとあも、早うと皮や骨が、  
科多の油へて見えけん、ハワキリ、  
うましくまふ、  
元米植物の皮、  
合道、  
ハ取りとつて、  
ハ煮火、  
ハ酸味、  
ハ皮、  
ハく、  
ハうま























さらば三枝に表立ての中を頼まんとはいへんに先しは  
待たず様よと父兄も法にこそをまの日の帰リ  
にきき申しかるに有けん、其後法益梅支と僅  
しく利益にいかはるることいひて来んらん、母は  
みく玉腹と其請求を酌り給ひしに、さらば此後  
成りのかゝりと破法に成りぬ、我もとふは是れん心  
の引かゝるも悲す、去つとも悔きつゝもあはれぬ  
丹君のさまとせん、怒り給ひぬとてに取らば  
めて其まゝに年月過きんを、さるる後方よむ  
性後更なるまゝかみ、替りて父表かゝりて  
お心かけて訪ひし、新年の礼かゝりぬ、  
任官と成後、出達とせん、その時を我々

かゝるに、おまゝに、おまゝに、おまゝに、おまゝに、  
へん、故に、是れん、こゝに、まゝに、おまゝに、おまゝに、  
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、  
又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、又、  
叶、叶、叶、叶、叶、叶、叶、叶、叶、叶、叶、叶、叶、叶、叶、  
其昔のかけし止め、借財山の如く、おまゝに、おまゝに、  
の我の筆先の少く、持て引まゝに、おまゝに、おまゝに、  
界、人、の、あ、ち、の、ん、世、の、か、ろ、め、ん、和、辱、因、縁、の、  
又、眼、の、ま、ご、と、を、か、り、人、の、言、を、き、き、宣、れ、の、初、の、如、  
く、実、家、に、ま、わ、る、中、意、の、い、ら、く、盛、大、の、成、り、と、  
し、し、け、し、き、大、姉、の、可、某、生、未、商、の、ま、あ、に、お、ま、  
又、三、の、の、利、潤、を、し、り、り、身、の、お、ま、の、換











一人のかえりなごころめりなり

こころよこころみかへさるる

一あねの位牌をえとておとしめ

線香をさかへさるる

一盃の傍後をいひあはせり

えり子させさるる

一お子傳のいひあはせり

いひまはせり

一にはとるる

早起すきり

一音聲とるる

はし

一あやみの山器を極えとていひ

あやとていひ

一いひとていひ

お粥香をいひ

一末遣のいひ

いひ

一かけしりの来るる

お冬をいひ

一借金取来るる

お粥のいひ

一長居する客のいひ

不登をいひ











○山陽の長崎舟板八首と細書一巻の幅二題  
 運と海ありあり、試又几詩鈔、終すまゝと爲  
 するに改竄しつゝ其な多し、且の詩鈔の二  
 首と送す、後此果廻すも一具也、左の如し  
 所里と、即ち系心とて余の巻運の幅、如  
 の所也

(八月六日記)

朱字、晚年修正す、此詩鈔に載す

長崎竹枝 節録八首

肥海松魚始上街。火雲稍作四作亂拳

堆連朝少女風方熟。等候待洋船

入港來。

白榜青尊乘暮天。撐過海船繫



梳邊請君莫笑銀杯小。酒得東

吳萬里船。第三用坡翁全句

朝朝岑索與眉齊。一狎吳郎兒。

艷妻看取心情冰雪潔。鐵漿不肯

漆瓠犀。

捧茗添香頰。指中雙眼語意何。  
眼語相承兩意同。添香捧茗指呼  
窮中洞房不用煩傳譯。自有靈犀

一點通。

鬢側釵橫夢一場。耐他雲雨盡任

情狂。眠醒剎帳春如海。銀鼎



燒餘安息香。<sup>真</sup> 扇<sup>別</sup>樓下邊<sup>漿</sup>邊<sup>碧</sup>檻紅燈閃  
 碧欄紅燭閃瓊危扇樣湖前移  
 玉危<sup>棹</sup>遙試倚船窓呼姊妹認它夜  
 宴侍胡兒。<sup>盈</sup>盈積水<sup>隔</sup>音塵穿<sup>眼</sup>來<sup>枕</sup>阿  
 煙波深處是蘇別脉脉芳心附

海鷗<sup>那</sup>自慰吾儂勝織女一年兩  
 度<sup>那</sup>遊郎舟<sup>那</sup>  
 金鬢芳柔壓海腴百杯泉釀瀉  
 真珠容誇拙戰稍高格昨夜三  
 贏<sup>吳</sup>眼奴<sup>下</sup>



余鬢鬢已三毛、情況非復昔日強  
習為綺語、徒造口業、亦聊  
紀風俗、供它日觀玩耳、讀者  
幸莫認為揚別小杜也

山陽外史識

竹分二の詩山陽詩鈔に受て

○支那人の性格の明る復た其の安んずることを其  
が難い。久しく支那より其の民族性も下りてある日  
本人も其の支へるもの、果して是れか誤りたるを  
察せんとすか、支那人も直接支へて見れば、  
久しく思ひの如く、現代支那の地一、論定  
と云ふに、ある林漢達先生の考へ、察を得た。冷静さ  
客観的態度を失ひ、公平な觀察を思ひ、  
勿論自國の民族性、考へ察するものから、善悪の  
いふ、未だ、未だ、他國人の考へ察するもの  
欲を得る者もや、思ひ、

本誌雲の自國の民族性の諸特性を左の如く列挙  
して



- 一 徳儀
- 二 竹筒素
- 三 自然と安んず
- 四 忍耐
- 五 無関心
- 六 老捨
- 七 多産
- 八 勤勉
- 九 節儉
- 十 家族生活と孝行
- 十一 平和主義
- 十二 知足

徳儀

十三 エーモア

- 十四 保守
- 十五 好色

林漢堂の支那人性格の深極的特徴、固執、又在つとを  
 してゐる、即ち人生及び人間性の固執、此理解が支那  
 人の性格の理想である、この理解から平和主義、知足  
 平和、忍耐の如き特性が生ずる、儒教が教へた宿命観  
 の平和及び知足の基礎であるといひ、平和が人生の價  
 値にあることを決つて、實現不可能な道徳や改革に對し  
 て努力し、平和の民族の古く文化をせよ、一歩退いて自己  
 の手の内にある幸福を足らざるつとめ、將杖の所謂  
 一歩を捨て、全向の勝利を得ること目を慮致してゐる。









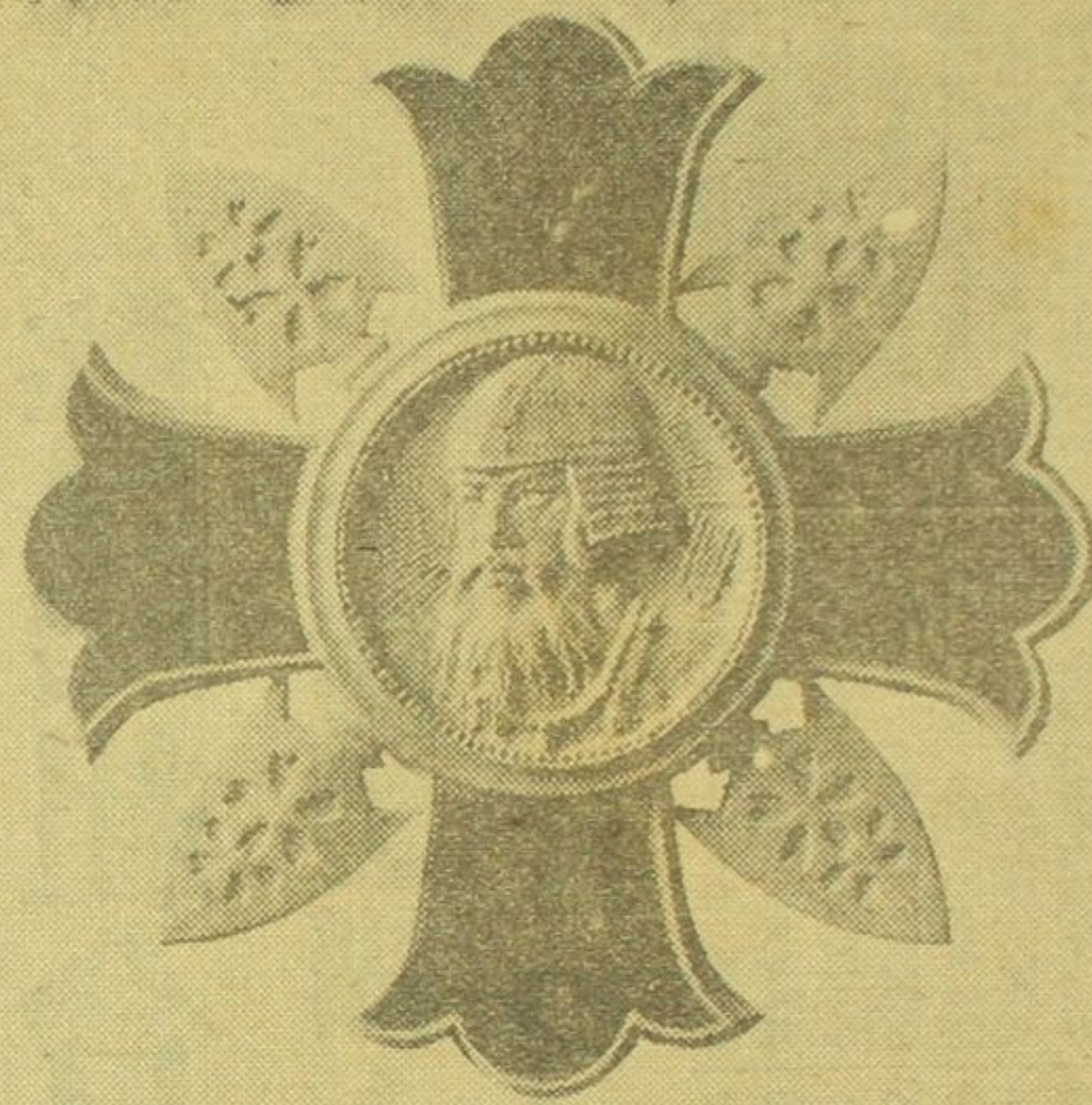






### 軍人傷痕新記章

影響ある陸海軍傷痕記章たる事象  
 識しこれを保護、傳遞する「軍人傷痕記章令」は今回改正せられ九月一日から實施される同記章は「戦傷」「公傷」の二種に別れてゐる。寫眞を改正された軍人傷痕新記章



### 軍人傷痕記章就テ

中央武神像ヲ刻ミ放射状ニ上茂盾  
 及三根櫻透鐵各四個ヲ配ス盾  
 及鐵ノ紋防ヲ意味シ盾ノ赤色ハ赤誠ト  
 赤十字トナ併セ形ドレ、至三種純  
 銀製赤色七寶入戰傷記章ハ全部  
 金鍍金、公傷記章ハ中央武神像部ニ  
 金鍍金トス裏面ニ軍人傷痕記章戰  
 傷天ハ公傷ノ文字ヲ刻ム、二本ノ針ヨ  
 リ佩用ス、圖案及原型ハ陸軍省囑託海  
 軍省囑託日名子實三ノ創作ナリ、

「公傷」といへるならば別に公傷人の財力が八紘一字を實現してゐるのである。

軍事行動にもせよ、日本のそれに軍事意識が伴はないならば、ヨシ世界を征服し得たところで、それは成吉思汗や、ナポレオンや、アレキサンダーの軍事行動と選ぶところはないであらうし、その未嘗や真れむべしだ。日本の軍事行動にはその一步一步に八紘一字の理想の確信が置かれる。それは言葉を変へれば道義的建設といふことである。日本の意志と感情が正しき意味に於て磨練され、認識されるだけの規模と編成とを有してはなからぬ。敵に勝たねばならぬのは素より、勝つた後の戦利を完全に收拾し、整理し、そ

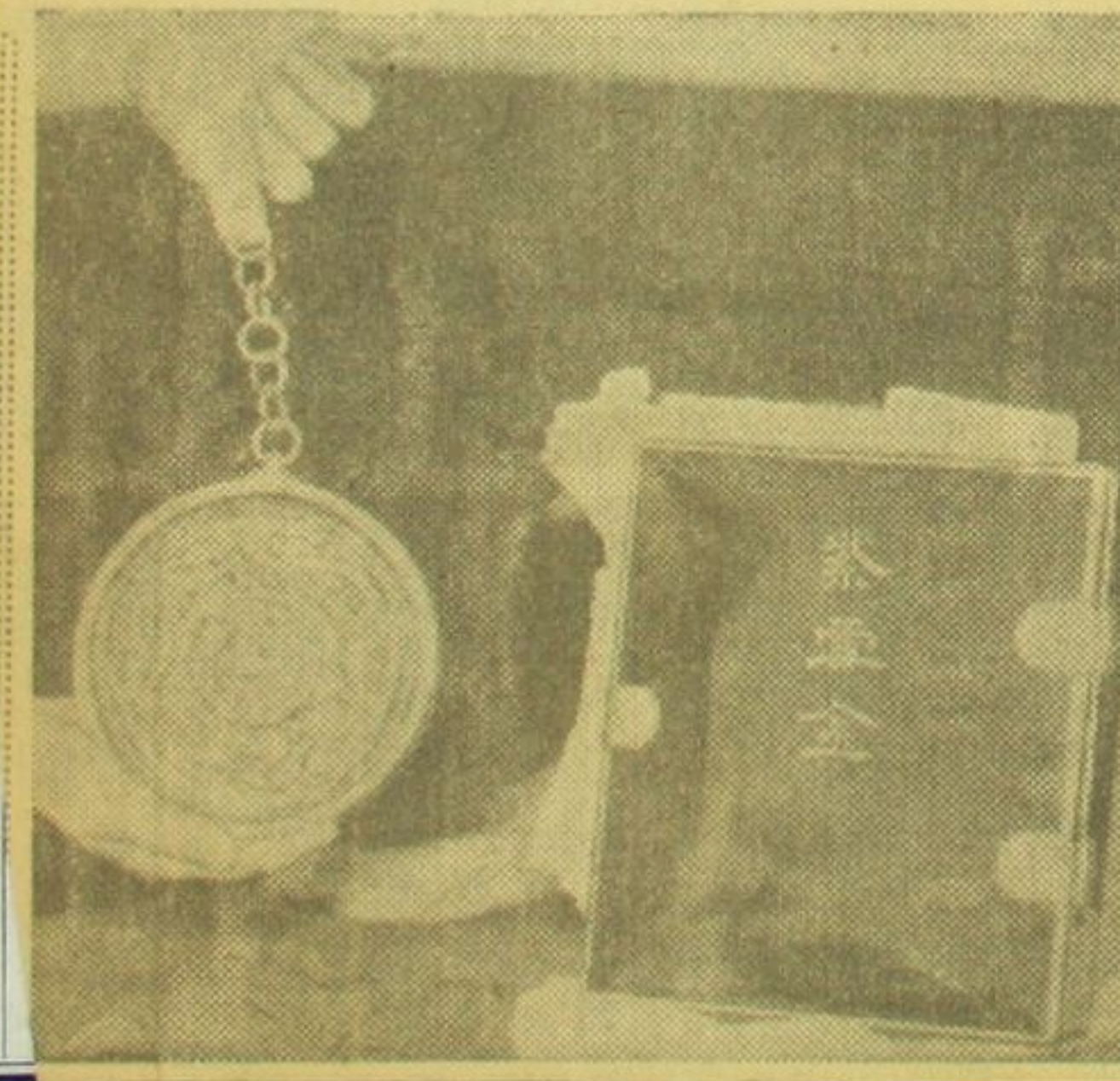
交行動には先づ八紘一字の基本原則たる國體の實現が第一とされねばならぬ。國體實現を伴はぬ外交行動は日本の外交行動とはいへない。例へばその一例には田中内閣時代の「人民の名に於て」外交があつた。この一例の如きは、その條約の性質即ち不平等條約そのものからして、餘りにも反國體のであり、非八紘一字的であつた。それは餘りにも顯著なる例であるが、甚だ顯著ならざるものには、現に取り上げられつゝある經濟外交と稱するもの、如き、この唯物的、商取引的、金銭出納的、收支計画的行動を以て外交唯一の使命と得居る如き、外務大臣の署名を國家理想を以て臨むの類を擧示得るであらう。實例なる西洋の形式と、現地に有り合はせぬ文化と、而して産業交通貿易

## 烈公愛用の紫雪金

### 徳川圀順公が搬入

本邦の金銀貨幣の波に乗つて、日本一の巨大な金蓋が飛び出し世間をアツといはせたが廿七日またく日本銀行へ、買戻條件付買却分として徳川の徳川圀順公邸から貴重な寶物が搬入された。これは水戸烈公が愛用してゐた徳川製に似つた「紫雪金」と稱する廿金製直径六寸一貫五百五

十々の鎖つき圓板でこの金の圓板を裏面にいれ他の銀草と煮て烈公の持物を作つたもので、處方を書いた烈公自筆の巻物も添へられてあるが、日露戦争時日本銀行へ一度納つたこともありこんど二度の徳川公といふ歴史的の貴重品である（寫眞はその紫雪金）





# 東郷元帥の銘に薫る

## 直徑一尺一寸の金釜

### 金總動員參加の超弩級

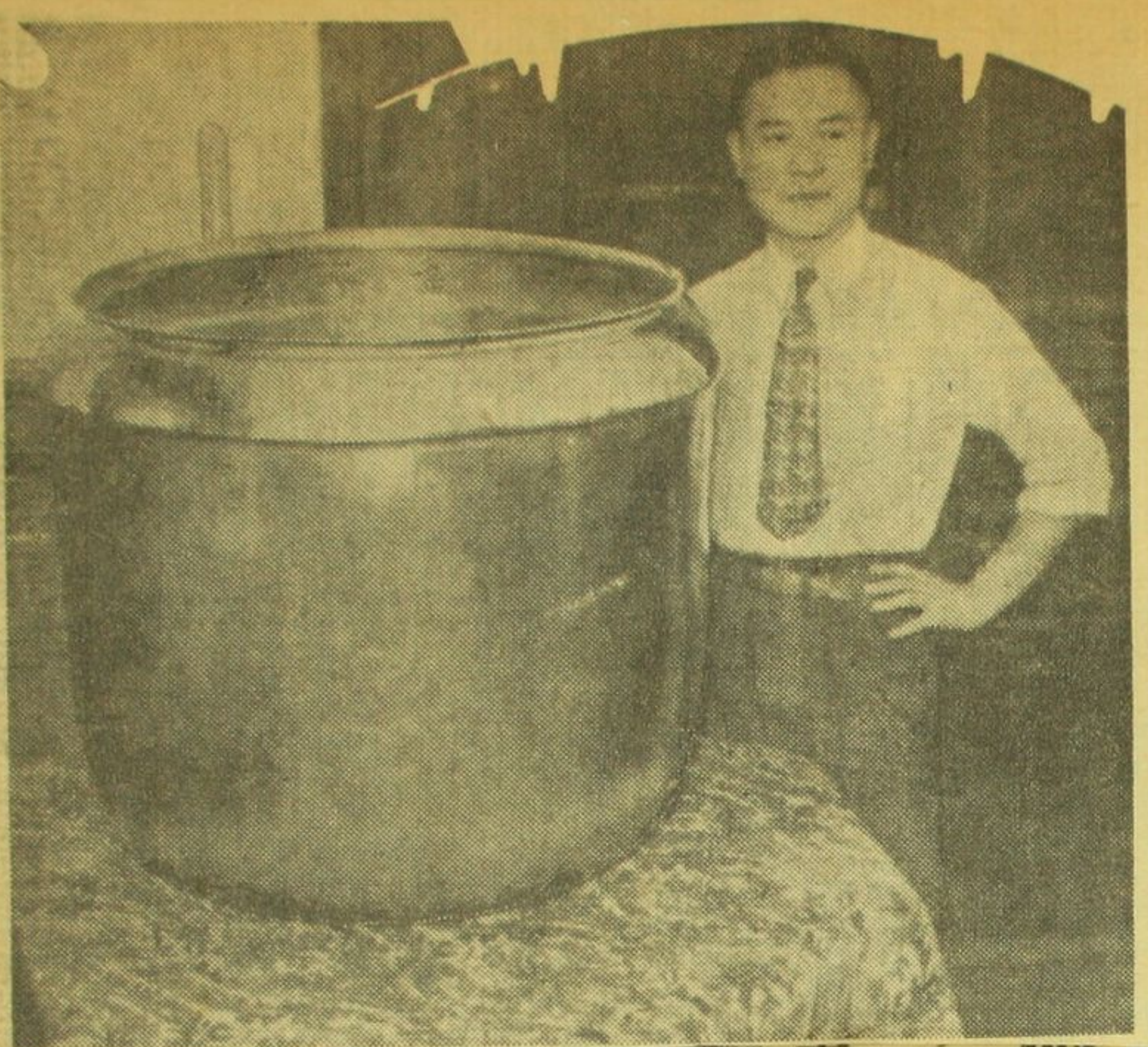
とまれこの柴田商店の金釜は先代幸三郎翁が日露戦争直後平和を記念するために明治廿九年十月御金十貫匁を購入、御田の

徳力本店鈴木喜兵衛氏をして鑄造させた直徑二尺二寸五分、高さ二尺三寸五分、上部十八金、副及び底部十四金製である。東郷元帥が同年十二月釜の鑄功を祝して「太平釜」の命名書を幸三郎翁に贈った由縁深い貴重品である。翁はこの金釜を同家醸造酒の樽酒に使用、その酒が「金釜」として酒黨に愛飲されてゐる大衆とも縁のある釜で、幸三郎翁未亡人さまも、當主幸三郎氏はじめ一門一家ごとくが本社の金總動員に共鳴、熱誠が買却となつたのである。柴田商店を訪へばよ未亡人は語る。

「この金釜は先代が美酒樽酒をつくるために日露戦争後平和記念に作つたもので家寶としてあるものですが、この非常時に金釜でお酒をつくることよりも御國のためにと存じまして幸ひ鑄せられたので、持参したわけですから（實價は柴田家の賣却金金）

大山東出張所長赴任  
【大阪版】日に増し白熱化しつつある金融運動に一層拍車をかけるため逓信局では東京出張所に試験部試験課長授師大山高良氏を任命したが同氏は廿七日午後九時半大阪驛發列車で赴任する。

本財源の愛國金總動員運動は本社即ち日本銀行の「買戻條件付金製買入」の取扱開始により感々金動員に精彩を放つにいたり従来の金製品買却買取取扱と、ともに逐日騰貴へ金取中の成果を挙げつゝあるが廿六日午後二時過ぎつひに密書の超金釜が日本銀行へ搬入され黄金の取扱については少しづらるでは驚かぬ行員もアツとはかり、可愛い少女給仕さんたちまで「金の釜よ、大きいわね」と眼を白黒、これは京橋區鍛冶橋前清酒、金釜「銀釜」の製造元合資會社柴田商店代表取締役柴田よきさんが金總動員に共鳴し、日銀の



吸る  
釣鐘  
工寺から獻納

此の釣鐘は明治三十六年第五回内閣博覽會の大阪開催を機に諸宗各派の僧衆一萬名を網羅し法鼓堂々梵鐘鐘々三寶を興隆して上聖恩の萬分一に報い奉じうと鐘造を企てたもので寄捨するもの九萬人、十二萬圓の外珍奇の古鐘十五萬枚九千貫の地金寄附によつて生れ現在この四萬三千貫の釣鐘そのものを使に一グラム五厘の赤金の價格で見積ると銀額七十八萬七千五百圓となり、古鐘に含む金分、銀分を算定推算する時は百萬圓と見られる鐘の内部にコーン！と鐘

紙國産の推威

# セイムライラ

スラスラ  
フレックスタイ  
ライラベビ

全國百貨店 材商店にあり  
(型録有郵分發)

東京 富士光學工業株式會社

鐘となつて了つたものだ  
御同寺ではこの外先に風水害の被害となつて倒壊した五重の塔、九輪塔をも相共に國幣記念する豫定である【寫眞は百萬圓の釣鐘】









大島敬治氏

# レコードにも凱歌 原料の輸入無用!

蓄音機レコード製造の主要原料と

して南洋方面から輸入されてきた天然樹脂(シエラック及びコパル)が輸入禁止となつたため蓄音機製造を妨げ、蓄音機製造を来してあるが、この天然樹脂に代へるに國産人造樹脂をもつて、大島敬治氏が大阪市立工業研究所の青年助手大島敬治(博士)が

の手で完成され、忽ちこの優みは解決した

シエラック及びコパルは南洋インド方面の産物であり、吾國の輸入総額は年額七百五萬圓に達し、この内約五割をレコード製造に消費してゐた

大島博士は一昨年来同研究所に在り、睡野博士指導のもとに研究に着手し、苦心の結果、クレゾール及

びフォルマリンを原料とする合成人造樹脂の製作に成功、可溶性、硬度、光澤、耐熱、耐水、耐酸、耐アルカリ等において従来のレコードに優るものが出来、既に川崎市瑞穂町の工場に於て製造を開始し、今來る八月一日より新原料によるレコードを市場へ送ることとなつた  
同この研究については獨りレコード製造業者への供給に止らず、塗料方面への發展も囑望され、農工省、文部省等より助成金、學術獎勵金が下付されることになつて、日蘭兩國を始め、英、米、佛、獨、伊の聲許も出願中である  
二十日東京中の發明者大島博士は、新原料によるレコードは耐水性が強いので雨季にカビが生えないといふ長所もあり、百回以上レコードを掛けて見て、針に對する硬度が従来のものに優つてゐることがわかります、現在シエラックの公定価格は百斤八十五圓ですが、實際は二百四十圓位に下げられ、手に入りません、新原料はこの公定値段と同じ位で供給出来る

## 靈水の名躍如

### 富士金銀明水

#### 水質は水道顔負け

#### 涼しい話題

金明水と云はれ、銀明水と云はれて、如何なる思ひもこれを欲めば或はつければ忽ち癒される——といふ富士山頂の「靈水」を化學的に分析して見ました。なるほどその純粋さ、蒸留水に近いまで性質が良く、軟水で、勿論アンモニアや有機物のやうなものも含まれてゐませんし、東京市が何百萬圓といふ費用をかけて殺菌、消毒、濾した水道の水も、この天然の金、銀明水には到底及ぶべくもないのです。

去る昭和十年七月卅日、これは船津氏が登山の際持ち歸つたものを檢べたのですが、そのあとに置いて保存三年後の今日に至つても、かほいさゝかの變化も見せません。

し實に緻密な檢査をし直して見たところ驚いてゐるのです。  
**靈水の分析表**  
分析の結果を他の水道の水、井戸水等と比較して見ると次の通りです。

金明水	0.5	痕跡	1.5	0.7	中性
水道水	1.5	1.5	0.7	弱酸性	
井戸水	2.3	6.3	0.0	微酸性	
浅いもの	3.0	6.3	0.0	酸性	
六〇〇尺の井戸水	2.8	3.5	0.0	弱酸性	
石内一万尺のもの	2.0	3.5	0.0	弱酸性	
井戸水の平均	2.0	3.5	0.0	弱酸性	

硬度の高い低いといふ事は、石灰分マグネシウム等が多いか少ないかといふ事で、御承知の通り硬水は煮物、洗濯等に不適當で、お化粧にも皮膚を荒していけないもの

です。軟水はその反対、何に使ふにも都合がよいのです。クロール(鹽分)は地層にもよりますが、特に海岸には多いのですが、普通には井戸の湧出が不完全で、汚水の流れ込んでゐる水に多く含まれてゐます。

過マンガン酸加里の消費量といふのは、これを加へ反應をあらはすまでの量の事ですが、やはり不純な水程多いのです。反應、酸性にも傾かない、アルカリ性にも傾かない中性の上い事は云ふまでもありません。

#### 登山者の責任

そこで金明水銀明水ですが、恐らく富士山の頂上に、降りつもつ美しい雪を溶けてもつ一瓢となつたものでありませう。ホコリが立つわけなし、煤煙が来る譯でなし、汚物が流れ込むわけなし、それら靈水と云はれるまで

に清く澄んでゐるのです。しかしこれを今後永久に「靈水」で保存せらるかどうか、その責任はひと登山者にかゝつてゐる譯であります。







# 鹽加減にも心せよ

## まづ工業用を制限

長期戦下にあつて全面に物資の抑揚が行はれてゐるが近く鹽までがこの抑揚の対象のお仲間入りをしなければならぬ。今後は安んずるどころか、とうっかり無敵には使へなくなる。

我國に於ける食用、工業用鹽の使用量は昭和元年約八十四萬七千噸であつたものが同九年には早くも約倍額の百六十三萬八千噸に達し更に十二年には二百二十一萬六千噸と

年々 増加して來た。これはス、フその他の鹽維工業或は製鹽工業、硝子工業等鹽を消費する諸工業が發達したため十二年度使用量の大半百五十五萬三千噸もこの工業鹽の使用であつたが

これに對し我國の生産は十二年度の例を見ても工業鹽の全部と食料鹽の一部十二萬七千噸と合計百六十八萬噸(その價格約二千八百二十七萬圓)は關東州、北支、ソマリランド等から輸入しなければならぬ現状である。然して輸入制限に努むべき長期戦下に直而して政府では十三年度の工業鹽の使用量を百四十五萬噸に制限する計畫の下に着々實行を進めて來たが最近更に輸入額を制限せねば

ならない情勢になつたので、工業鹽に對する一時的輸入制限強化を行ふことになり目下大藏省專員で慎重に具體案を作成中である。今度制限を強化される鹽は百四十五萬噸の中約十萬石近い額と見られてゐるが、この工業鹽の數に對する使用制限強化は食料、味噌、醤油その他の調味料として國民の日常生活になくはならぬ食用鹽に對しても當然その使用制限が考慮されるわけである。このまゝの情勢が今後相當長く續くとすれば、何かと不自由勝ちな國民の爲にせめて食用鹽だけは手をつけず豊富に供給してやりたいといふ大藏省の強い親心も蓋しは放棄しなければならぬかも知れず、大藏省としても國民の鹽の節約を切に希望してゐる。

# 遂に 銅滓から鐵

## 輸入の大半を補ふ

大阪電報 どの銅の製錬所でもこれ迄焙燒爐から抽出される多量の銅滓はその中に二十パーセント乃至四十パーセントの鐵分が含まれてゐることが分つて居ながらそれを採り出す方法が不可能とされそのまゝ海岸や谷間に無難作に捨てられてゐたが製鐵下の銅滓を焙燒して鐵を抽出する方法が考案された。

女中 至急募 収入有りまなく働ける 女中 給十圓以上 十五圓 確実 女中 給十圓以上 十五圓 確実 女中 給十圓以上 十五圓 確実

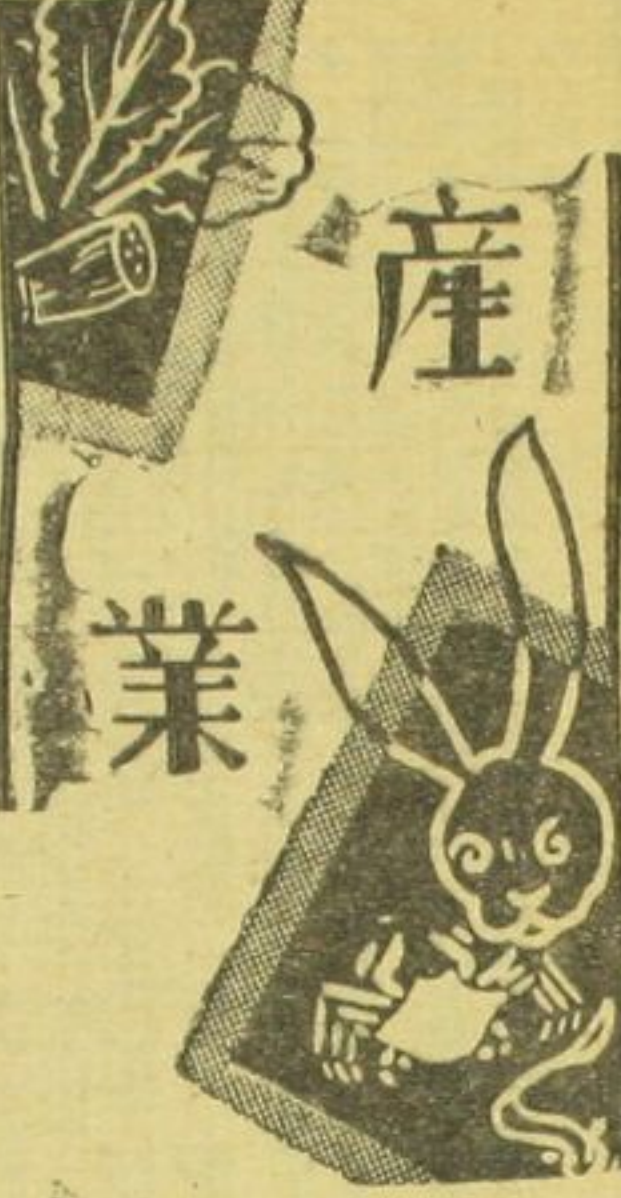
急募 すぐ収入有りまなく働ける 女中 給十圓以上 十五圓 確実 女中 給十圓以上 十五圓 確実 女中 給十圓以上 十五圓 確実

急募 すぐ収入有りまなく働ける 女中 給十圓以上 十五圓 確実 女中 給十圓以上 十五圓 確実 女中 給十圓以上 十五圓 確実

急募 すぐ収入有りまなく働ける 女中 給十圓以上 十五圓 確実 女中 給十圓以上 十五圓 確実 女中 給十圓以上 十五圓 確実

### 四面にもあり

小商店 員十四名 十八名 急募 住込 芝川町八丁目 商業 商店 小商店 員十四名 十八名 急募 住込 芝川町八丁目 商業 商店



### ガソリン代用木炭

#### 需要激増で配給難

ガソリン節約の國策に沿つて帝都の各自動車會社では木炭自動車の使用を開始してゐるが、来る八月から一層強度のガソリン節約が實施されるので、東京市バスを初め各會社では早くも七月より木炭自動車の増産を行ふこととなつた。

等品であるが、目下木炭の需要明のこととして右の如き並等品は地よりの出荷少く全販廠でも並等品の集荷に懸命の活動を續けてゐるが、到底右の需要には應じ切れない模様である。

即ち、ガソリン一ガロンに相當する木炭は一貫二、三百円といはれ、並等品で五十二圓、ガソリン一ガロン六十四圓に比し約三割安く、この値幅を以てしては會社も採算がとれるが、上等品を使用すれば採算割れとなるため、専ら並等品を所望してゐる、而して産地には既に並等品が品切となつてを以て、全販廠でも會社側の要望に添ふべく努力中であるが、結局さき

Advertisement for 'Nippon Kasei Kaisha, Ltd.' (日本興業株式会社) featuring a grid of text and a small illustration of a person.



# 鹽加減にも心せよ

## まづ工業用を制限

長期戦下にあつて全面に物資の抑制が行はれてゐるが、鹽は工業用を制限するに心せよ

我國に於ける食用、工業用鹽の使用量は昭和元年約八十四萬七千噸であつたものが同九年には早くも約倍の百六十三萬八千噸に達し、更に十二年には二百二十一萬六千噸と

年々増加して來た。これはス・フその他の鹽類工業或は製鹽工業、硝子工業等鹽を消費する諸工業が發達したためで十二年度使用量の大半百五十五萬三千噸もこの工業鹽の使用であつたが

これに對し我國の生産は十二年度の例を見ても工業鹽の全部と食用鹽の一部十二萬七千噸と合計百六十八萬噸(その價格約二千八百二十七萬圓)は關東州、北支、ソマリランド等から輸入しなければならぬ現状である、然して輸入に對しては長期戦下に直面して政府では十三年度の工業鹽の使用量を百四十五萬噸に制限する計畫の下に着々實行を進めて來たが最近更に輸入額を制限せねば

ならない情勢になつたので、工業鹽に對する一時的制限を強化を行ふことになり目下大藏省專員で慎重に具體案を作成中である、今度制限を強化される鹽は百四十五萬噸の中約十萬石近い額と見られてゐるが、この工業鹽の數量に對する使用制限強化は食鹽、味噌、醬油その他の調味料として國民の日常生活になくはならぬ食用鹽に對しても當然その使用制限が考慮されるわけである、このまゝの情勢が今後相當長く續くとすれば、何かと不自由勝ちな國民の爲にせめて食用鹽だけは手をつけず豊富に供給してやりたいといふ大藏省の温い観心も益には放棄しなければならぬかも知れず、大藏省としても國民の鹽の節約を切に希望してゐる。

# 遂に 銅滓から鐵

## 輸入の大半を補ふ



士博川松 士博藤齋

「大阪電報」 この銅の製錬所でもこれ迄焙燒爐から抽出される多量の銅滓はその中に二十パーセント乃至四十パーセントの鐵分が含まれてゐることが分つて居ながらそれを採り出す方法が不可能とされそのまゝ海岸や谷間に無作為に捨てられてゐたが製鐵下の國家的要請は遂にわが科學戰士をしてこの至難な研究に成功し立派に工業化の見込みもつき活用すれば輸入既年約百萬噸(昭和十年)の大半はこれでシャットアウトされる事になり、目下佐友その他の銅の製錬所で着々兩博士の業績を實行に移す試みが開始に取りかゝつてゐる。

に成功したもので、これによつて製出された鐵は一パーセント以下の濃度の銅をも含有してゐるため濃縮になつた場合の腐敗を防止し、頗る優秀である。七十萬噸の鐵が得られる等品であるが、目下必要のない餘剰品である、右の如き並等品は産地よりの出向少く全販賣でも並等品の集荷に懸命の活動を續けてゐるが、到底右の需要には應じ切れない模様である。



業

# ガソリン代用木炭

## 需要激増で配給難

ガソリン節約の國策線に沿つて右の現狀に鑑み、全販賣ではガソリンの各自動車會社では木炭自動車の使用を開始してゐるが、来る五月中の動を續けてゐるが、去る五月中の販賣數量は市バス湖南、東横、環に農林省が各地で講習會を開き、八月から一層強度のガソリン節約状態その他各社に約三千億で、七生産指導を行つたガソリン代用木炭の生産出荷をまたねば會社に對を初め會社では早くも七月より月中には右の數倍に上る見込みである、然し目下各社が要望してゐる圓滑なる商路は困難であらう、木炭は副産物の一種、鐵の製煉の副産物と見られてゐる。

面駝れ倦睡とを面きの高活の八り八分人

この科學の戰士は阪大工学部の齋藤大吉、松川達夫の兩博士で昨年事業勃發とともに鐵製鐵の祖國に貢獻すべく研究に狂奔をかけ、昨秋福岡における學界でその業績の一部を發表、その後更に研究を急成し近く出版される日本鐵製鐵會誌七月版にその全貌を示す論文を發表する運びになつたものである。

團ち千二百近い高熱を帯びてドロドロになつて排出されるこれら銅滓のもつ自燃量を利用して蒸餾の分解還元により鐵液を

なほわが國の銅子、足尾、日立その他の各製鐵所で廢棄される銅滓の量は年二百八十萬噸に上りその全部を假に鐵に還元すると年七十萬噸の鐵が得られる

即ち、ガソリン一ガロンに相當する木炭は一貫二、三百分といはれ、並等品で五十二圓、ガソリン一ガロン六十四圓に比し約二割安く、この價值を以てしては會社も採算がとれるが、上等品を使用すれば採算割れとなるため、専ら並等品を所望してゐる、而して産地に既に並等品が品切となつてを

面駝れ倦睡とを面きの高活の八り八分人















# 東京日日新聞

同合報新事時  
(日八月三年五十二治明)  
可認物使郵種三第

昭和十三年  
七月一日  
號外

【錄再不紙本】

基 馬相 人行發刷印報輯編

所行發

店支京東社報新日每版大

目丁一町榮有區町麹

號三地番一十

社聞新日日京東

## 極東ゲ・ペ・ウの總元締 リユ シコフ 大將滿洲國で抑留

禁解午正日一

### 間島省琿春付近へ越境



フコシユリ

「新京本社特電」(廿三日發) 關東軍司令部發表「ソ聯內務人民委員部(ゲ・ペ・ウ)極東長官リユシコフ政治

#### 「清史稿」發刊之主旨

「清史稿」乃係北京政府依照中國歷朝當新朝興起之際、編纂前朝歷史之慣例而編纂之、清朝十二代三百年歷史「清史稿」、此名本為清朝之正史、即清史之稿本之意、本書原係政府規定清史館官制、使七百餘名學者擔任編纂事務、支出國帑數十萬元、費民國三年至民國十五年、即十有二年之月日、始告完成者也、故本書應稱清朝之正史、將來能否另編優於本書之清史、蓋屬疑問。

本書做自史記漢書以降至明史之歷代正史之體裁、分成本紀、表、志、世家、列傳等之類、計分五百三十六卷、老然成爲一大鉅冊、而頁數實已凌駕史記及漢書、與宋史及明史相伯仲、故本書就其體裁及頁數而論、自應稱爲清朝之正史也、而以「清史稿」爲其書名、不外表示編纂者對於學術上之敏銳的良心、因之從來在中國合併自漢代至明代之二十四朝之正史、而稱「二十四史」、今後應附加清史稿而稱二十五史、故將本書除外者、自無談論中國歷史之資格也

清朝三百年因接連於現代、故清朝史乃不得不謂對於欲究明現代之中國及滿洲蒙古者、比其他何朝之歷史爲最重要、本書之記述上自皇帝之尊位、下至黎庶之食貨、內自宮庭之秘事、外至邊疆絕域之外交、凡清朝三百年間、在人間界、並自然界、發生之所有重大事件、幾無未在本書內載錄者、此非過言也、故本書不問其研究之目的係屬政治、或者法制、經濟、社會、宗教、風俗、再不論天文、曆、數學以及其他之科學、苟既關於中國及滿洲蒙古之事項、對研究者供給確實且豐富之材料、誠可謂「汲而不盡之泉」也、今時各界關於滿洲及蒙古要求、比從來一層確實之認識、故吾信本書並非僅被一部少數學者尊重之珍籍、而爲應被一般大眾利用之寶典。

然本書曾被南京政府認爲其記事與國民黨不利、遂遭禁止發賣之厄、並該印版亦被沒收、其結果現在坊間殆絕其影、縱以鉅款尙難購得、本館有鑑於此、從當地一部識者熱誠之提倡、甘受莫大犧牲、且冒事業之危險、重刊本書而廣布於世、以期醫救學界多年之渴望、同時貢獻一般大眾對中國及滿洲蒙古一層確實之認識。

大同印書館謹啓



# 東京日日新聞

同合報新事時

(日八月三年五十二治明)  
可認物便郵種三第

昭和十三年

號外

七月一日

【錄再不紙本】

基 馬相 人行發刷印兼輯編

所行發

店支京東社報新日每版大

目丁一町榮有區町難

號三地番一十

社聞新日日京東

## 極東ゲ・ヘ・ウの總元締 リユ シコフ 大將滿洲國で抑留

禁解午正日一

### 間島省琿春付近へ越境



將大フコシユリ

「新京本社特電」(廿三日發) 關東軍司令部發表「ソ聯內務人民委員部(ゲ・ヘ・ウ)極東長官リユシコフ政治大將は六月十三日午前五時卅分滿ソ東部國境間島省琿春滿洲國境警

察隊方面に越境逃亡し來り同警察隊に抑留せられたり、これが詳細は廿三日午後五時滿洲國治安部より發表せる如し(裏面参照)

「清史稿」發刊之主旨

「清史稿」乃係北京政府依照中國歷朝當新朝興起之際、編纂前朝歷史之慣例而編纂之、清十二代三百年歷史「清史稿」、此名本為清朝之正史、即清史之稿本之意、本書原係政府規定清史館官制、使七百餘名學者擔任編纂事務、支出國帑數十萬元、費民國三年至民國十五年、即十有二年之月日、始告完成者也、故本書應稱清朝之正史、將來能否另編優於本書之清史、蓋屬疑問。

本書做自史記漢書以降至明史之歷代正史之體裁、分成本紀、表、志、世家、列傳等之類、計分五百三十六卷、老然成爲一大鉅冊、而頁數實已凌駕史記及漢書、與宋史及明史相伯仲、故本書就其體裁及頁數而論、自應稱爲清朝之正史也、而以「清史稿」爲其書名、不外表示編纂者對於學術上之敏銳的良心、因之從來在中國合併自漢代至明代之二十四朝之正史、而稱二十四史、今後應附加清史稿而稱二十五史、故將本書除外者、自無談論中國歷史之資格也

清朝三百年因接連於現代、故清朝史乃不得不謂對於欲究明現代之中國及滿洲蒙古者、比其他何朝之歷史爲最重要、本書之記述上自皇帝之尊位、下至黎庶之食貨、內自宮庭之秘事、外至邊疆絕域之外交、凡清朝三百年間、在人間界、並自然界、發生之所有重大事件、幾無未在本書內載錄者、此非過言也、故本書不問其研究之目的係屬政治、或者法制、經濟、社會、宗教、風俗、再不論天文、曆、數學以及其他之科學、苟既關於中國及滿洲蒙古之事項、對研究者供給確實且豐富之材料、誠可謂「汲而不盡之泉」也、今時各界關於滿洲及蒙古要求、比從來一層確實之認識、故吾信本書並非僅被一部少數學者尊重之珍籍、而爲應被一般大衆利用之寶典。

然本書曾被南京政府認爲其記事與國民黨不利、遂遭禁止發賣之厄、並該印版亦被沒收、其結果現在坊間殆絕其影、縱以鉅款尙難購得、本館有鑑於此、從當地一部識者熱誠之提倡、甘受莫大犧牲、且冒事業之危險、重刊本書而廣布於世、以期醫救學界多年之渴望、同時貢獻一般大衆對中國及滿洲蒙古一層確實之認識。

大同印書館謹啓













池大雅筆羅漢圖

(年三十不眠) 錦月六燈堂

紫烟天國の愉しき消息

Cope.—Smoke-Room Booklets.

A Complete Set, 14 numbers of these tastefully produced booklets. Also: Five pieces of miscellanea. With a Frontisp. of each Vol., many Illus. & a vignette Title. Together, 19. Parts. Svo, & 4to, wrappers, pp. altogether, 909. Liverpool, 1878-94.

¥ 82.50

◇コオプ會社は英國名代の煙草商、その“Golden Cloud”の如き一世に愛用され、チケンス作中の人物がコオプ製品に馴染んでゐるなど、即ち十九世紀後半の愛煙状態を語るものであらう。同社は中ば宣傳の目的から“Tabacco Plant”なる月刊印刷物を出してゐたが、更にその所載の珠玉を類聚して本叢書を編んだ。いづれも小冊子とは云へ紫烟趣味の充溢する貴重文献を成し、愛煙家の愛惜誦讀措かざりしもの。いまや揃物など市上全く稀觀に屬する時、その全部のみか其他 cope 出版の冊子を加へての提供は、斯道愛好の士を狂喜せしむるに足ると信じる◇

Barbier, C.—Histoire du tabac; ses persécutions. 2nd Ed. Paris, 1861. 24mo, wrappers, pp. 93. .... 7.75

Barthélemy.—L'art de fumer ou la pipe et le cigare. With Pls. N. p., n. d. Pott 8vo, wrappers, pp. 108. .... 13.50

Bertherand, A.—De l'habitude du tabac. Paris, 1874. Fcp. Svo, wrappers, pp. 44. .... 6.25

Blatin, A.—Recherches physiologiques et cliniques sur la nicotine et le tabac. Paris, 1870. Roy. Svo, wrappers, pp. 207. .... 16.00

Blismon, A.-G.—Tabaciana. Recueil intéressant dédié aux tabacomanes et aux antagonistes du cigare, de la pipe et de la tabatière. Paris, n. d. (ca. 1850). 18mo, wrappers, pp. 288. .... 17.50

Bragge, W.—Catalogue of Books Relating to Tobacco, being a Most Extensive Assemblage of Works upon its Growth and Manufacture, also its Use and Abuse, forming a Library of the Whole Literature of Tobacco, comprising many Rare and Curious Books, Pamphlets, &c. Comprising various other Catalogues. London, 1882 Roy. Svo, half mor., pp. 17, 117, 47, 37, 22, 37, 47, 145, 18, 19. .... 18.50

Bryant, J. F.—Verses, by John Frederick Bryant, late Tabacco-Pipe-Maker at Bristol. Together with his Life. 2nd Ed. London, 1787. Svo, wrappers, pp. 6 lvs., xxxi, 64. .... 13.50

Cardon, E.—Le musée du fumeur traitant du tabac et de la pipe et comprenant le récit du voyage de l'auteur en Orient. Paris, 1866. Cr. Svo, wrappers, pp. 281. .... 7.50



..... pp. iii, 308. .... 12.00  
 a priser et a mâcher. With 18 illus. Paris, 1891. Cr. Svo, wrappers,  
 miques, industrielles, hygiéniques et fiscales sur le tabac a fumer.  
**Larbalétrier, A.**—Le tabac. Etudes historiques chimiques agrono-

- Carpenter, R. L.**—A Lecture on Tobacco. 2nd Ed., Revised. Manchester, 1892. Fcp. Svo, wrappers, pp. 32. .... 5.25
- Clarke, A.**—A Dissertation on the Use and Abuse of Tobacco. Wherein the Advantages and Disadvantages attending the Consumption of that Entertaining Weed, are particularly Considered. London, 1857. Cr. Svo, half calf, pp. iv, 32. .... 19.00
- Covnter-Blaste (A)** to Tobacco. (Written by King James I.) Edinburgh, 1884. Fcp. Svo, parchment, pp. 32. .... 9.50
- Cundall, J. W.**—"Pipes and Tobacco", being a Discourse on Smoking and Smokers. With a Plate. London, n. d. (1901). Narrow Cr. Svo, cloth, pp. 103. .... 4.25
- De** la culture et du commerce du tabac en France, considérés dans leurs rapports avec l'économie politique. Strassbourg, 1819. Svo, unbound, pp. 59. .... 7.50
- Depierris, H. A.**—La prise de tabac, son origine et ses effets. Paris, 1882. Svo, wrappers, pp. 16. .... 4.25
- Dissertation (A)** on the Use and Abuse of Tobacco. London, 1720. Svo, no cover, pp. viii, 24. .... 36.00
- Fume, J.**—A Paper, of Tobacco; Treating of the Rise, Progress, Pleasure, and Advantages of Smoking with Anecdotes of Distinguished Smokers, Mems, on Pipes and Tobacco-Boxes, and a Tritical Essay on Snuff. With a Frontisp. & Illus. London, 1839. Pott Svo, half calf, pp. iv, 165. .... 34.50
- Grenet, A.**—Influences du tabac sur l'homme. Paris, 1841. Svo, boards, pp. 283. .... 16.00
- Hahn, A.**—TABAKOLOGIA sive de Tabaco Dissertatio. Jena, 1667. Pott 4to, sprinkled calf, pp. 32. .... 38.00
- Heward, E. V.**—St. Nicotine of the Peace Pipe. With 4 Pls. & 5 Text Cuts. London, 1909. Svo, cloth, pp. xvi, 197. .... 15.75
- Ienichen, G. A.**—Observationes selectae criminales de Tabaco. Giessae, 1756. Pott 4to, wrappers, pp. xviii. .... 35.00
- Jennings, J.**—A Practical Treatise on the History, Medical Properties, and Cultivation of Tobacco. With a Plate. London, 1830. Cr. Svo, half cloth, pp. vi, 159. .... 25.00
- Knight, J.**—Pipe and Pouch. The Smoker's Own Book of Poetry. 1st Ed. With a Frontisp. Boston, 1895. Sm. 4to, buckram, pp. xvi, 182. .... 12.00







池大雅筆羅漢圖

- Clarke, A.**—A Dissertation on the Use and Abuse of Tobacco. Written by King James I. Edin-  
burgh, 1684. Fcp. 8vo, half calf, pp. iv, 32. .... 19.00  
Wherein the Advantages and Disadvantages attending the Con-  
sumption of that Entertaining Weed, are particularly Considered.  
London, 1857. Cr. 8vo, wrappers, pp. 32. .... 5.25
- Carpenter, R. L.**—A Lecture on Tobacco. 2nd Ed., Revised. Man-  
chester, 1892. Fcp. 8vo, wrappers, pp. 32. .... 5.25
- Larbalétrier, A.**—Le tabac. Études historiques chimiques agrono-  
miques, industrielles, hygiéniques et fiscales sur le tabac à fumer,  
à priser et à mâcher. With 18 Illus. Paris, 1891. Cr. 8vo, wrappers,  
pp. iii, 303. .... 12.00
- Lavedan, El Lig. Don A.**—Tratado de los usos, abusos, propie-  
dades y virtudes del Tabaco, Café, Té y Chocolate. Madrid, 1796.  
Svo, old calf, pp. 5 lvs., 237. .... 52.50
- Lizars, J.**—Practical Observations on the Use and Abuse of Tobacco.  
Edinburgh, 1854. Med. 8vo, wrappers, pp. 15. .... 6.50
- Lutte (La) contre l'abus du tabac.** With Portrs., etc. Paris, 1890.  
Cr. 8vo, wrappers, pp. xvi, 236. .... 14.00
- Magnenus, J. C.**—Exercitationes de Tabaco ad Illvstrissimum  
Heroem Othonem Caimvm Supremi Italiae Consilij Regentem In-  
clytum. Pavia, 1648. Med. 8vo, old calf, pp. 6 lvs., 192. .... 47.50
- Murray, J. C.**—Smoking: When Injurious, when Innocuous, when  
Beneficial. London, 1871. Fcp. 8vo, wrappers, pp. viii, 64. .... 9.50
- Neander, J.**—Tabacologia: hoc est Tabaci, seu Nicotianæ descriptio  
Medico-Chirurgico-Pharmaceutica vel ejus preparatio et usus in  
omnibus fermè corporis Humani incomodis. With a Frontisp. &  
9 Pls. Leiden, 1626. Fcp. 4to, vellum, pp. 20 lvs., 256. .... 150.00
- Nicolle, E.**—Le tabac, le haschisch, les fumeurs d'opium. Rouen,  
1869. 8vo, wrappers, pp. 39. .... 9.50
- Penn, W. A.**—The Sovereign Herbe. A History of Tobacco. With  
Illus. London, 1902. 8vo, cloth, pp. 5 lvs., 326. .... 16.50
- Pritchett, R. T.**—Smokiana. Historical and Ethnographical. With  
num. Illus. London, 1897. 4to, calf, pp. 101. .... 15.00
- Ryle, Ch. de.**—La pipe. Poème tabaco-didactique. With Illus. Paris,  
n. d. (1862). Med. 8vo, wrappers, pp. 32. .... 12.50
- Schranka, Dr. E. M.**—Tabak-Anekdoten. With 175 Illus. Cöln,  
1914. Med. 8vo, wrappers, pp. 302. .... 20.00
- Shew, J.**—Tobacco: Its History, Nature, and Effects on the Body  
and Mind. Manchester, n. d. (1890). 8vo, wrappers, pp. 40. .... 5.00
- Silberberg, L.**—Tobacco: Its Use and Abuse. London, 1875. Pott  
8vo, cloth, pp. 62. .... 4.85



**Steinmetz, A.**—Tobacco; Its History, Cultivation, Manufacture, and Adulterations. London, 1857. Pott. 8vo, wrappers, pp. 174. ....16.50

**Stella, D. B.**—Il Tabacco Opera di Benedetto Stella da Civita Castellana M. D. S. B. Nella quale si tratta dell'Origine, Historia, Coltura, Preparatione, Qualita, Natura, Virtu, & Vso in Fvmo, in Polvere, in Foglia, in Lambitivo, et in Medicina. Roma, 1669. Pott 8vo, vellum, pp. 480.  
*Binding broken & pp. 479-480 torn off.* .....95.00

**Tabakscultuur** (De) in Deli. Amsterdam, 1889. Imp. 8vo, cloth, pp. 220..... 9.00

**Tatham, Wm.**—An Historical and Practical Essay on the Culture and Commerce of Tobacco. With 2 col., 2 plain Pls. London, 1800. Med. 8vo, calf, pp. xv, 330.....65.00

**Thunberg, T.**—Tobak. (Smaskrifter Utgivna av Sverges Lärares Nykterhetsförbund. Nr. 3). With Illus. Uppsala, n. d. (1915). 8vo, wrappers, pp. 16..... 2.00

**Tobacco** Battered, and the Pipes Shattered (about their Ears that Idly Idolize so Base and Barbarous a Weed; or at Least-Wise over-Love so loath some Vanitie). Excerpt with printed title from Du Bartas' Works. N. p., n. d. Pott folio, wrappers, pp. 571-579. ....19.00

**Tobacco** Whiffs for the Smoking Carriage. A History of the Tobacco We Smoke, &c. 2nd Ed. London, 1881. 8vo, wrappers, pp. 102. .... 5.50

**Truth** in Wine; A Pipe of Tobacco; The Cost, Joys, and Woes of Smoking. Excerpts from an Old Magazine. N. p., n. d. (1869). Med. 8vo, wrappers, pp. 16..... 5.75

**Venner, T.**—A Briefe and Accurate Treatise concerning the Taking of the Fume of Tobacco, which very many, in these dayes, doe too too licenciously use. London, 1650. Sm. 4to, half calf, pp. 397-417. ....85.00

**Vicente, J. de.**—El tabaco sus malos efectos en la salud y en las facultades intelectuales y morales, Madrid, 1868. Sm. 4to, wrappers, pp. x, 11-100.....12.00

**Wilson, D.**—Pipes and Tobacco; an Ethnographic Sketch, With a Frontisp. & 2 Pls. Toronto, 1857. Med. 8vo, half calf, pp. 52...85.00





Stella, D. B.—Il Tabacco Opera di Benedetto Stella da Civita Castellana M. D. S. B. Nella quale si tratta dell'Origine, Historia, Cultura, Preparazione, Qualità, Natura, Virtù, & Vso in Fumo, in Polvere, in Foglia, in Lambitivo, et in Medicina. Roma, 1650.

Steinmetz, A.—Tobacco: Its History, Cultivation, Manufacture, and Adulterations. London, 1857. Pott, 8vo, wrappers, pp. 174. price, 16.50.



池大雅筆  
羅漢圖

池大雅

